

青森往還記

－ 青森公立大学図書館への松田寄贈本についての覚書 －

松田 芳郎[※]

Röslein sprach: Ich steche dich,
Dass du ewig denkst an mich,
Und ich wills nicht leiden.
----- Goethe; Heidenröslein.*

* 青森公立大に講義に通う往復の旅は、新しい研究室に読み差しの書物を運んで置いてきたり、また戻りの旅で、これまで読む暇のなかった書物や幾度も読んだ書物を機中で読むために抱えて戻ることの繰り返しであった。それはこれまでの自分の生活史と読書歴の回顧の旅でもあり、青森公立大に残すべき書物とあと少し手元に残すべき書物との選択の旅でもあった。書物というのは、読む人の心に何かを突き刺して残すものかもしれない。シューベルトが歌った野薔薇のとげの様に。

1. プロローグ

それぞれの人が、自身の研究生活の黄昏時にその蔵書の処理に悩まされるようである。周知のように、生存余命の延長とともに、いつまで今行っている研究が継続できるのかと老後設計との兼ね合いでの課題である。最近多くの友人がその専門分野の蔵書を処分するのを見ていると、もうこれで仕事をするのではないと思いつめたからかもしれないと想像する。友人のなかで、現役のうちに蔵書をどうするかに見事に配慮しているのは、京都大学人文科学研究所が長かった山本有造教授の京大退官の際の処理である。岳父の文庫と一緒に自分の蔵書の中から関連部分を含めて、書誌目録作成能力のある人を見つけ研究費を割いて目録化作業をされていた¹⁾。

その目録化に掛けた努力は特筆に値するだけでなく、自分の専門領域の仕事を節目節目で上梓される仕事ぶりには脱帽する他はない。さらに自分の蔵書の中核部分の行き先を決めていられるとのことである。東京大学社会科学研究所の田島俊雄教授は、中国本土の文献が体系的に

入手されていない台湾大学に自分の集書を寄贈する決断をしたその努力もまた多とすべきである²⁾。

一橋大学を定年退官されたフランス啓蒙思想の研究家の高橋安光先生は、東京国際大学の経済学部勤められすれ違いで私が赴任する少し前に、再度の定年になられ、その時に蔵書を東京国際大学附属図書館に寄贈された。後に神田の古書店街で偶然お目にかかる折があった「一度は処分したのだが、また必要に応じて買う始末です」と苦笑いされていた。先生の蔵書は書庫の中で未整理であるのを知っていただけに、在任中に何とかできないかと、東京国際大の蔵書構築に一番努力を傾けていた川嶋行彦教授と未整理のDorfman文庫のパンフレット類の整理と合わせてたびたび相談したが、在任中に実りを結ぶことが出来なかった。心残りである。恩師の山田雄三先生が生前、東京商科大学で同期生だった金子泰蔵氏に懇望されて氏が東京国際大学の前身の国際商科大学設立し総長に就任時に寄贈された文献は図書館に目録があるだけで現物は残っていないとのことである。後に記すが

※ 青森公立大学教授

私が大学院経済学研究科長時に博士課程設立の為に買い求めた文庫は、受け入れの目録ファイルは作成したが、まだ公開の為に整備はされていない。私以外にも、伝え聞いて機会があれば利用したいという人もいたので目録の刊行が待たれている。

私の場合は、一橋大学定年時には蔵書を整理することもなかったし、東京国際大学で再度の定年に当たって、結局その性（さが）懶惰の故に、折々に興味を持って集めた資料も生かしきれずにおり、人生の黄昏時に何を捨てるべきか決めかねていた。加えてまだ現役のつもりであり、し残している研究関連の資料もあるので、蔵書を今少し残すか、それともどこかに一括寄贈したうえで利用した方がよいのかと思いつていた。さまざまに悩んでいるときに青森公立大学大学院経営経済学研究科で博士課程を新設するにあたって、昔小樽商科大学で教鞭をとった折の教え子の一人の今喜典教授が研究科長としてその衝にあたっていた。私は、一橋大学定年後、東京国際大学経済学部へ赴任したが、その大学院は博士課程まであったのは商学研究科のみで、経済学研究科は、修士課程だけであった。経済学研究科の教員に、新たに博士課程の新設する希望があり、偶然赴任後経済学研究科長に選出され、博士課程設立の任に当たった。その時にこれまでの日本の大学院にはない設計を考えて、1回の申請で実現した。最近の大学院強化で提言されていることのかかなりの部分を先取りして制度化しており、当時としては極めて斬新な計画であったと自負している。今研究科長は、ある時それに興味を示され、その計画と方式について私に色々質問された。後日、その成果を生かして青森公立大学の大学院の拡充に助言してもらえないかという意向をもらされ、博士課程で研究指導を行う資格のあるいわゆるマル合教授が必要なのでその一人としての就任を打診された。

日本学術会議の会員であった折に同大学を訪問する機会があり、その折に図書館をつぶさに見せてもらったこともあった。設立後あまり日の経っていない大学ではあるが、私の学んだ商

学部だけの小樽商科大学のように経営経済学部だけの単科大学であり、親近感が感じられた。その上設立時の集書はかなり努力を払った跡が見られる。とはいえ、設立当初の集書設計された人たちと私とは観点が違うらしく、これまでの収書の努力の結果の補充として、私の蔵書もあまり重複なく生きるのではないかとも思われたので、蔵書を引き取って頂けるならという条件を付したところ、佐々木恒男学長の快諾も得られたとのことで赴任することに決めた。

私の蔵書構成の根幹は、統計学の実証主義はコントに遡ることができるという思想に基づいている。それは、フランス啓蒙主義の思想改革運動にも連動するし、何よりもサンシモン主義の産業主義に関連しそれは現代経営理論の根底に通じるものがあると考えていたからである。幸い佐々木恒男学長はフランス経営学の専門家として著名であり、私の蔵書にも理解が得られたのかもしれないと思った。

学長からは、注解目録の作成に助力してほしいとの希望が出されていた。ただ青森の地で八方手を尽くしたが、洋書目録を取りうる人が見つからず、整理は遅延を重ねてきている。任期の終了を前に、最小限文庫の特色を記して学長の要望に応えたいと思った。

もっとも、自身の仕事が対外的にどのように評価されているかは知らないが、少なくとも経済統計の専門家として、学界活動と政府の統計行政への助言で果たしてきた役割は、その分野の専門家には多少知られているかもしれない。この自分の専門に関連しての統計資料の利用の仕方と読み方に関しては、若いころからの畏友で、一時期東京国際大学で同僚ともなった原朗東京大学名誉教授が、私のささやかな統計調査に関する資料の収集を見て、東京国際大学の定年で四散するのを恐れて、統計資料の解題を書くことを勧められ、機会を作ってくくださった。それは、この2010年10月に「日本経済史講座」第6巻『日本経済史研究入門』所収の「近代日本経済資料論1. 統計」（木村健二との共著）として上梓されたものであり、佐々木学長の要望の一端は満たすことが出来たと思っている。

この経済統計に関するこれまでの研究によるささやかな学問上の貢献は、明治以降の統計調査史の研究と表裏をなしており、それには自分なりの現代経済史の解釈がある。特に企業統計・産業統計が自分の関心事であったので、明治以降の日本の企業統計史に必要な会計制度の成立史も射程のうちにあり、若干の資料も集めていた。また小樽から東京に配置換え（当時は国立大学は、すべて同じ機構の下であった）の後、統計審議会の専門委員として情報処理部会、調査技術開発部会等に参加し、さらにその後は正委員として、企業統計部会、国民経済計算部会、国民生活部会などの部会長を務めたので、関連統計に関する資料も集めることができたし、海外統計事情の調査で各国統計関係機関等を訪問して求めてきた資料も数多くある。しかしそこまで筆を伸ばすことは上記の統計資料論ではできなかったし、何よりも統計制度を考えるにも、当然その背後にはそれなりの社会科学像を自分もっているつもりなので、それがどの様なものであるのかは、当然この統計資料論では触れていない。この自分の社会科学像は格別取り立て述べる必要のないものと思っていたが、自身の文庫の解説を兼ねて記しておかなければならないと思い直すようになった。

解説が必要と思うようになったきっかけは、ひょっとすると自分の社会科学観という学問観というのは、日本社会では特殊なのかもしれないということを、日本学術会議の学術情報専門委員会を皮切りに経済統計研究委員会の専門委員を務め、さらにいくつかの学会の理事・理事長・会長等の役も務めたなかで感じたからである。それまでは、さほど多くの研究者と立ち入った方法論上の議論や学問のあり方の議論をするわけでもなかったし、自分の学問上の遍歴がそれほど特異なものとは思っていなかった。けれども、学術会議の第2回の改変期の第17-19期の会員で、特に学術基盤情報常置委員会の委員長として運営審議会に出席する様になってそのように思うようになった。特に、吉田民人副会長の提案の将来の日本の学問のあり方に関する提言は、納得できないものであり、それなり

の意見を述べる機会にも恵まれた³⁾。そこで痛感したのは、日本の学界の有り方と管見に入る世界の学界の有り方とは大きく違っているのではないかということである。理化学・工学・医学等のいわゆる自然科学系の学問の方たちはそれなりに欧米の学問との落差を感じていないわけではないようであるが、それが社会の中での位置づけとなるとやはり人文諸学・社会科学の欧米の学問との落差ほど切実でないように思えてならなかった。一言でいうと旧制高等学校から帝国大学へ至る現在の国立大学で学問形成を行った人たちと旧制高等商業学校・高等工業学校等を経て実学系の商科大学・工業大学へ至る国立大学で学問形成を行った人たちと政府の庇護のない中で私立大学で学問形成を行った人たちとの学問の社会における学問のあり方に対する考え方の違いである。私立大学はそれぞれ独特の歴史をもっており簡単には概括できないのも事実である。

ただ、吉田会員の方法論の底流にあるのは、Karl Popperが*The Poverty of Historicism* (1944, Routledge, London, (市井三郎訳：『歴史主義の貧困：社会科学の方法と実践』（中央公論社、1961年））で批判したwholismに他ならないのではないかと言外に匂わせながら学術会議の総会等で批判した塩野谷祐一会員達の意見は素直にうなづけるものがあつた。他方、例えマルクス主義の立場をとる人たちの社会批判であっても、それは官許マルクス主義であって、お上の学問としての体制改革に過ぎないという思いが捨てがたく残った。

極めて荒っぽく概括するならば、明治維新以後の日本の欧米に追随してのいわゆる「近代化」とそのような「近代化」では不十分であるとしてマルクス主義にたつての批判が第2次世界大戦後復活したのをどう理解するのかということ、そこで暗黙の前提になっている戦後占領軍のお仕着せの「民主主義」をも肯定することが出来るのかとの2点に集約される。いづれにしても、明治以降の日本での言論思想表現の自由があるように見えた時代でも、大きな枠がかぶせられていてそれをどこまで自覚しているかとい

う問題に帰着するかということである。それは日本における書かれたものがどう読まれてきたかと同時にそれらが時代を越えてどう保存されて読まれてきたかの問題でもある⁴⁾。後者は知識と文化の世代間を越えての伝承のあり方につながっていく。明治維新が大きな断絶であるとすれば、第2次世界大戦後の占領下の日本もそれに劣らぬ大きな断絶があったのではないかと思われる。明治維新の断絶は、言語改革にせよ教育と研究の制度化にせよ、それは少なくとも日本人の主体的な決断で行われたものであるのに対して、占領下の断絶は、それ自体を人々の意識の俎上に載せないように行われた側面がある。現在それを自覚的に知るためには、図書館の充実以外にはないはずである。ただそのような物に体化したものを通じてあるいはそれを保存することのみよっての伝承には、大きな限界があるのではなかろうか、やはり言葉になりえないものを何らかの形で言語化して伝える必要があるのではなかろうかということである。

ただ、その考えをまとめて記す折はあまりなかった⁵⁾、そのような学問観を形成するに至った自分の経歴と思想史と社会史の自分なりの解釈をもたらした自分の読書歴の反映として、収書のなかになにがあるのかの解説を兼ねて、本稿を記すことにした。多少はある稀観書と図書館・情報学研究の文献を中心に文庫全体の解説は別稿として、"Extract from the Catalogue of the Rare Books and Related Documents Donated to the Library of the Aomori Public College as Matsuda Library"で示すことにし、次号以降に掲載していただくことになった。

2. 自伝的経歴とその社会・経済史的背景

生れたのは、西暦1935（昭和10）年7月6日であり、北海道の貿易港小樽市が誕生の地である。昭和17年4月1日に小樽市立入船国民学校に入学。まもなく、入船国民学校は日本陸軍の兵舎に徴用され、女子商業学校の校舎に一時引っ越す。昭和20年8月15日敗戦、入船国民学校はまた元の校舎に戻る。そのため児童は机を蟻のように手で運ぶ。過労のためか休む。あまり体調が戻ら

ないので、長橋の外れの結核療養所に連れられて、レントゲン写真で「肺門に蔭がある」といわれ、長期学校を休む。幸い敗戦後の混乱であまり学校の授業も無く無事進級する。自宅で手当たり次第に濫読する。宮澤賢治から夏目漱石まで、わかったのかわからなかったのか不明。なお結核療養所の医者は野口先生といわれ、後に野口病院を市内に開業する。（後に心臓移植手術の最初の心臓提供病院で知られる。）国民学校は6・3制になり小学校と名称変更しさらに、小樽市立東山中学校に進む。これは当時の女子商業学校でもあったので、古巣に戻ったことにもなる。昭和26年北海道立千秋高等学校に進学。昭和29年4月小樽商科大学商学部に入學。1958（昭和33）年4月一橋大学大学院経済学研究科修士課程入学、博士課程を単位修得退学、その後、1963（昭和38）年5月1日付けで小樽商科大学講師〔商学部〕に任用され、計量経済学を担当することになった。1966（昭和41）年10月1日助教授に昇進し、1973（昭和48）年10月1日一橋大学助教授〔経済研究所附属日本経済統計文献センター〕に配置換え、1979（昭和54）年10月1日教授昇進し、1999（平成11）年3月31日付けで定年退官し、引き続き東京国際大学経済学部勤務し、2006（平成18）年3月31日付けで定年退職し、4月1日付けで青森公立大学経営経済学部教授に就任した。

この学歴も職歴も、大して面白いことがあるわけではない。しかし生きてきた時代そのものは波乱万丈の時代であった。子供のころ可愛がってくれた従兄の一人は小樽商科大学の前身の小樽経済専門学校生として、学徒出陣し、亡くなった。沖縄での特攻攻撃での死亡であったとのことである。小樽商科大学の戦没学徒慰霊碑に名が刻まれている。叔父の一人は敗戦間際に召集され、ソ連が日ソ不可侵条約を一方的に破棄の結果、千島で捕虜になりシベリアに連行され、一度便りがあったそうであるが、かの地で亡くなった。餓死とのことである⁶⁾。

治安維持法下での伏字と占領下の非公開検閲制度の差

自宅は借家で、小樽市内を2-3度引越をした。

その際に家財道具はたいしてなかったが、大量にあったのは父の書物で、その運送には苦労したようで、同僚の教師たちが手伝って箱詰めしてくれていた。自分もランドセルに入れて何冊かの本を運ばされた。そのなかに天野貞祐『道理の感覚』と美濃部達吉『憲法撮要』（1923年）があった。前者の見返しには、父の手で、天野が「絶版にするの辞」をどこかに発表したのを丁寧に書き写してあった。荷物を搬送する人の目にも触れさせたくなかったのであろう。毎週とってもらった朝日新聞社の『週刊少国民』のある号の記事が、1/5ほど切られていた。不思議に思っ何が書かれていたのかをたどって、その後書店で同じ号が並んでいるのを見ると、自分の読んだ箇所より大きく切り取られていた。どうも家で私の読めた部分には戦況が不利になった状況が窺い知ることが出来る記述があり、書店で自分の手にしたのは、その部分がさらに切られていたらしい。本棚に有る本の他に納戸の書庫にある本には、明るいところで見ていたら叱られた記憶がある。ページ一面に○が続いた何が書いてあるのか判らない本であった。

戦後は、名付け親の飯田広太郎の手紙が、毎週のように父のところに來ていたが、それに占領軍の検閲済みのセロテープが貼って再封されていた。中学校に入って『憲法の話』と題した準教科書が配られ、言論の自由と検閲の禁止がかかっているのに不思議なことであると思った。占領軍の影響が無くなったのを知られたのは、なんとという雑誌か忘れたが吉田満「戦艦大和ノ最後」の掲載された仙花紙の印刷の悪いものに、占領が終わって初めて公表されると書いてあったのを父の机から持ってきて読んだ時である⁷⁾。

換言すれば、大正デモクラシの余波の漂う両親とその交遊圏が日常の暮らしであり、それが、治安維持法が強化され、市井の人の私生活の中に検閲と特高警察の影を落とす時代を経て、今度は敗戦に伴って、墨塗り教科書を経て、一見言論の自由があるかに見えて、占領軍の検閲がありながら、敗戦前の検閲が伏字（○やXで示す）でその存在を明示していた時代と違い、検閲の存在を隠べいする巧妙な検閲制度の下で

出版物を読み育ち、それが消えてなくなったかに見えても、どのような検閲が存在するのかを注意深く見守る必要のある時代に生きてきたと言える。ソ連邦の崩壊までは、出版界の左翼的自己規制も存在していたからである⁸⁾。これらの制約のあらゆる側面を何等かの形で子供のころから知ることが出来たということは、それ自体珍しい体験であったといえる。その歴史はやはり、次の世代にも伝えなければならないと思っている。

3. 少年時代の読書から主観的にはシュツルム・ウント・ドラנקの時期

自分自身は、この戦争下も戦後も、さしたることもなく過ごした。幸い、強制疎開で家を突然壊されることもなかったし、二人の姉たちと違って国民学校生徒の低学年は援農に駆り出されることもなかった。学童疎開もなかった。確か4年生のころに豊浦町の伯父の家に一人で汽車旅行した。昔近所で父の友人の峰山巖先生が画筆を折り、合唱団の指揮も止め郷里の伊達に引っ込んでいらしたのを訪れて昭和新山に連れて行ってもらった記憶がある。（後のことになるが、峰山先生は敗戦後、小樽に戻って來られて北海道立櫻陽高校の教師や札幌医科大学の講師になり、考古学でアイヌ研究に没頭された。もう画筆はとらなかったが、遺跡発掘報告書の土器の図版に往年の絵心を見せていた。）

ただ、敗戦後しばらくは、澱粉滓、ふすま滓、豆粕、海宝麵（海藻で作った麵）など牛馬の餌はすべて食用として食べたし、学校菜園でカボチャや薯を作らされて、泥棒に収穫をすべて持っていかれたし、家では冬季焚くものが無く、配給は沈粉という砂交じりの石炭の屑で、炭鉱で働いていた叔父の一人があるときリュックに一袋塊炭を運んできてくれてそれを砕いて少しづつ火付けにつかった。電気はたびたび停電するし、通電しても皆の使う時間帯は電圧が低く、港町であったので、低電圧用の船の電燈を買ってきて点けたり、ある時はランプを使用し、ホヤ磨きは手の小さな私の仕事であった。歴史というのはその中で暮らしているものにとっては

不可抗力の災難としての側面もある。ただ今にして思うと、明治・大正・昭和が暮らしのなかで見えてくる時代に育ってきたのであり、後で紙の上で読むのとは違った共感を体験することが出来た。

戦争に負けて印象的であったのは、もう夕方になっても窓を閉め切って灯火管制のためにひっそりと暮らす必要が無くなったことと夏であったので窓を大きく開けて蓄音機でレコードを掛けても良くなったことであろう。姉が友人から何枚かのクラシックレコードを借りてきて、幾度も聴いていたのを脇に座って一緒に聞いた。確か、ドヴォルザークの「新世界から」とチャイコフスキの「悲愴」があったことを憶えている。

この子供時代の読書は、記すと長くなる。国民学校に入る前と入ってからは、婦人之友社の『子供之友』と鈴の絵本の初山滋・武井武雄の絵におぼれ、島崎藤村の童話集（竹久夢二が挿絵を描いていた）、有島武郎の『一房の葡萄』、ワイルドの『柘榴の家』、アミーチスの『クオレ』、野上弥生子の『小さき生き物』の絵入り童話が宝物であり、手元に置いてあった。『婦人之友』はかなりの期間のバックナンバーが揃っていて、それには「パンなしジャン」や村山知義の絵の入ったピノッキオの物語や確かモロワのフランスとドイツの対抗を風刺した子供の物語が連載されていた。父のトルストイ全集にはトルストイの童話が収録されていて、父の買ってくれた当時の子供向けの「山本元帥伝」などの書物より面白かった。むしろ古い北垣恭二郎『国史美談』7冊を丹念に読んでいたり、父の『中央公論』に載った山本夏彦の翻訳の「年を経た鰐の話」を切り抜いてもらって、自分で表紙を付けて小冊子にした記憶がある。父の友人の石森延男の大連から送ってくる雑誌の『新童話』や、後では童話集をもらって読んでいた。ただ港街の故か、海軍は憧れていたので、父が町から若い海軍士官を連れてきてごちそうしていたのを記憶している。石森延男の『咲出す少年群』（1939）にも似たようなエピソードがあった記憶があるので、当時は珍しいことでもなかったのかもしれない。

れない。

敗戦後の文献の洪水：マルクス主義とその批判

戦争に負けると、洪水のように出てきた出版物はまた別種のものであった。国民学校を卒業する前後は、同級生の間では、雑誌の回し読みが始まっていた。借りたものには『子供の広場』（松川俊哉さんが購読）があり、自分の買ってもらったものには、『銀河』（山本有三編集、左横書きで固有名詞はカナ書）『赤とんぼ』（藤田圭雄編集、綴り方が募集されていて川端康成が選者であり、表紙は出開美千子という画家の幻想的な絵であった）と『少年クラブ』（戦時中までの『少年倶楽部』から1946年11月から改題されたらしい。分解して気に入ったものだけ自分で製本しなおしたので、残っていない。敗戦号は新聞紙の全紙の八折であり、宮城前に人々の膝まづく姿が見開きになって印刷されていた記憶がある。）がある。飯田広太郎の友人達の出していた『北の子供』は、だれも借り手がなかったと記憶している。宮澤賢治の童話の読後感の綴り方が載ってこども心に嬉しかった記憶がある。この飯田広太郎の子供の広夫・広子の二人には良く一緒に遊んでもらった。父に札幌に連れて行ってもらって、「小国民のために」叢書を一冊づつ読むのも楽しみであった。後で松田甚次郎編「宮澤賢治名作選」をもらった記憶がある。

授業は地理・歴史は禁止であったが、『くにの歩み』という教科書が配られた記憶がある。新制中学は小樽市立東山中学で、日本教職員組合北海道教職員組合（略して北教組）の実験学校というあだ名があったそうである。隣の組の担任は大原登志男【詩人としてのペンネームは「おおはらとしお」】先生で在籍のまま市議員に立候補当選し、後に兼職禁止で先生の方を辞められた。課外授業でフランシス・ジャムの詩や現代詩を教わった。担任は理科の山田克子先生奈良女高師出身。数学で図書室主任の加賀谷利政先生に可愛がられ、数学クラブに入った、非ユークリッド幾何学とか集合論を教わるが、何も理解できなかったのではないと思う。生徒会では、別なクラスの大竹由利さん【奈良女

子大を卒業して『婦人画報』編集部勤務、編集長になる」と新聞部に所属し一年上の笹川碩也さん【東京大学経済学部で横山正彦のゼミに所属。卒業後富士製鉄を経て新日鉄に勤務。故人】が生徒会からの担当委員で、謄写印刷でB4一枚の新聞を作って全校の各クラスに配っていた。大竹由利さんからは色々な本を借りた。記憶に残っているのは、サン・ピエールの『ポウルとヴィルジーニ』と幾つかの戯曲があった。筑摩書房からでた子供用の『資本論』の入門書に読みふけると同時に、『赤とんぼ』に連載された竹山道雄「ビルマの竖琴」を読んでいたら、加賀谷先生から、竹山の『手帖』（ナチズム批判とマルクス批判を兼ねてユダヤ教以来の一神教批判）などを教えられる。マルクス主義と反マルクス主義とを脈絡無く頭に入れる結果となった。由木康訳のパスカルの『パンセ』からマルタン・デュ・ガール『チボー一家の人々』、ロマン・ローラン『ジャンクリストフ』、ジッド全集、カロッサ全集など、図書室の本と1年上の笹川碩也さんの蔵書を借りまくって読んでいた。脈絡の無さは、愛読書に木下杢太郎の諸著作と並んで、戦時中の海軍憧れの軍艦少年の名残で、『日露戦争の海戦記』から櫻井忠恩『此の一戦』があり、笹川さんからスターリンの『大祖国戦争』を借りて読み、マルクス主義に半分傾倒していただに、第2次世界大戦で日ソ不可侵条約をソ連が廃棄して、日露戦争の復讐戦とソ連では位置づけていることに衝撃を受けた。叔父のシベリア抑留での餓死の知らせを聞いたのもこのころである。『チボー一家の人々』に描かれているジョーレスの反戦運動とソ連邦の成立にヨーロッパの知識人の寄せた期待とスターリンに示される第2次世界大戦後の社会主義国家との落差に驚く。山田吉彦の『フアーブル記』[岩波新書]を読んだのもこのころであるが、その著者が『世界』に連載した「気違い部落周遊紀行」の木田稔とは当時は知らなかった。（『世界』の初出は「きだみのる」ではなかったと記憶している。）岩波新書で記憶に残ったのは、林健太郎の『世界の歩み』上下2冊（1949-50）と渡辺一夫の『フランス ルネサンス断章』（1950）である。飯田

広夫はそこはもう北海道帝国大学医学部の助手をしていて、『チボー一家の人々』が面白かったという話をしたところ、トーマス・マンの『ブッデンブローグ家』と『魔の山』の文庫本を「読んでご覧」と貸してくれた。郊外散歩の面白さを教えてくれたのも同じころであった。

市内の中学校の英語劇コンクールでシエクスピアのヴェニスの商人のシャイロック役に扮する。当時北海道は本州内地と違ってまだ食糧が豊富だったらしく、さまざまな巡回興業があった。貝谷バレエ団や藤原歌劇団の公演は、中学生の団体観賞があった。「白鳥の湖」も「くるみ割り人形」も「カルメン」も「ラ・ボエーム」も、此の時に見たのが最初である。映画館を使用しての公演であり、後でアメリカ留学中にボストンでやはり映画館の改造したオペラハウスで、いろいろオペラを見たときに此の中学生のころのことを思い出した。小学生のころ近所にヴァイオリンを弾く中学生（旧制）の谷川有年さんがいて遊んでもらって、ドイツ・リートを教わったりした。（後に三菱造船に勤務。アマチュア・オーケストラでやはりヴァイオリンを弾いていたとのことである）。

中学を終えて新制高校に進学する段階になって1年上の笹川さんや若松美黄さん【北海道大学で永井陽之助に師事。後に現代舞踊家になり、筑波大学教授】たちは、地域制の実施にともない、全市が4つの高校に分けられ、北海道道立工業高校に普通科が置かれ北海道立千秋高等学校に改称されて、旧制小樽中学の後身の潮稜高校から学年の途中で転校させられる。私も千秋高校に進学する。担任は橋本徳寿の弟子の森定雄先生、国文法に関心を掻き立てられる。日夏耿之介の近代詩史に読みふけり、それを指針にして詩書を漁るが、次第に現代詩に関心が向き、金子光晴に傾倒する。経済学への関心は、中学時代の資本論第1巻・第2巻の入門書からやっと第3巻に移り、レーニンの「帝国主義論」や矢内原の帝国主義論が頭の中で同居する。英語は大竹延寿先生に英作文と英詩を少し習う、英詩は大学に行くと沢山教わるといわれる。波多野完治の『文章心理学』の谷崎と志賀の文体の

統計解析に惹かれ、時枝誠記の言語過程説に魅せられて国語学を勉強しようと志すが、父に新村出に教えるを請う手紙を出したが活字本にのみ依拠する田舎の貧書生に対する侮蔑的な返書をもたらたと見せられ、北海道のような国文学的資産のない植民地でしかも資産のない貧乏人が国語学を志す無謀に気づき諦める。文学部志望は諦めたとして、どこに行くか考えた。

生物部でハツカネズミの飼育を手伝っていたが、他の1年上のクラスの部員（鈴木弘泰さん【北海道大学を経て、後に北海道副知事】や朝倉祐司さん（京都大学を経て後京都府立医大教授。物故。）のように生きものを扱う分野に進む気持ちは無くなった。飯田広夫【後に北海道大学医学部教授、細菌学、1991没】は、森嶋外や木下奎太郎こと太田正雄の様に医学者で文学者もいと教えてくれたけれども。

ヨーロッパ文化とその言語

1954（昭和29年）4月に地元の小樽商科大学商学部に入學。当時火曜日と木曜日の1、2時間目は第2外国語と決まっていた日本人教師と外国人教師のコマが組合わせになっていた。経済学を学ぶのであるから、当然「資本論」を読むのであると思いドイツ語を選択。前田利道先生とゲルハルト・フーベル先生に教わる。2年次に、第3外国語は制度として履修は出来ないの、1年次の第2外国語として開講の松尾正路先生のフランス語の訳読・文法を聴講し、3年次には2年次の訳読だけを松尾正路先生に教わる。⁹⁾ 発音の重要性に気付かず、裏番組の講義を履修する必要から、組み合わせの大黒マチルド先生の会話の時間は取らずに済ませたので、いまだに発音はよろしくなく、当時、松尾先生に「君の発音は英語でフランス語でない」とたびたび叱られた。松尾先生には、年ごとに主題の変わる「外国文学」の講義を3年間聴講する。モンテニユーのエッセイから始まるモラリストの年に至る講義であったり、ベンジャマン・コンスタンからルソーへと行き来してスタンダールを経てブルーストに至る近代フランス文学の形成であった。当然単位として数えられたのは、1年分4単位だ

けである。広田二郎先生の国文学も何年も聴講した。

3年次になると会社勤めをするよりは、もう少し本を読み考えてみよう大学院に行くことを思いついた。そうになると当然、大学院卒業後の就職先はないに違いないからと、札幌西高出身の通学生の鈴木亮さんと英語の高校の教員免許を取ることにした。そのため、英語は多くの先生に教わる。特に、速川浩先生には英語の教職免許用の上級英語の科目も受けて、結局4年間幾つかの科目で教わった。（後で『フォークナー研究：手法と文体』（研究社、1961）を出している。教わったことが書いてあった。）NED（*A New English Dictionary on Historical Principles*）の引き方から始まり様々に英語の使用法をしごかれる。卒業に当たっては、「君達は英語の読書の絶対量で英文学科出身にはかなわない、しかしNEDの引き方から始めて勉強の方法は学んだはずだ」と励まされる。白川芳郎先生にはご自身の堀田善衛の小説【広場の孤独】の英訳の苦勞話とテキストに使用したエヴァリン・ウォーの*The Loved One*中でのイギリスとアメリカとの社会的風土の違い文化のあり方の落差が印象に残っていた。

「資本論」の世界といわゆる近代経済学

経済学に関しては、小樽商科大学の講義は高等学校で予想していたのとは違って、1年次に長谷部亮一先生の経済学概論で、ケインズの一般理論とヒックスの『価値と資本』を基軸にした講義を受け、中学以来のマルクス以外の経済学の存在を知らされる。テキストは山田雄三編の「経済学概論」と副読本の「経済学はいかに進歩したか」であった。「テキストのこの表現は誤りであるから、こう直すように」との指示がいろいろあり、大家の書くものにも誤りがあることを教えられた。

学生に人気のあったのは、浜林正夫先生で1年次には、社会学を開講していて、マックス・ウェーバーから出発することになり、これまたマルクス主義経済学とは違う理論を教えられ面食らう。みすず書房から復刻版の『プロテスタン

ティズムと資本主義の精神』を買い求めてドイツ語と苦闘したのも、このためであった。2年次には浜林先生の「経済史概論」を履修し、ポスタン、トーニィ、コスミンスキィと毎回の講義が面白かった。大塚久雄の『近代欧州経済史序説』が、中学生のころに読んだ林健太郎の『世界の歩み』(岩波新書)と同じ論理構成である事を知ったのもこの講義を通じてである。鈴木亮君はこの浜林先生に師事し、後に水田洋に就くべく名古屋大学の大学院に進学する、終生の話し相手になる。水田洋の著作を出るたびに読むようになったのは鈴木さんの影響である。

結局、中学・高校と勉強した社会科学とのつながりを求めて、同じ高校から進学した者たちで、読書会を作り、杉本栄一教授の諸著書にたどり着く。2年次の経済原論はシュンペータの弟子の早川三代治教授で、3年次の経済変動論に続く。ワルラスの静態論からシュンペータの動態論へと発展する。謹厳な話し方であるが、まれにドイツの学生生活の話に及ぶことがあった。中学校の同級生山川宏さんが北海道大学に進学していて、杉本栄一教授の弟子の早川泰正教授の経済原論の講義が面白いと言って、ノートを回覧してくれた。寡占理論中心で、同じ早川でも三代治先生よりも刺激が強い講義の様であった。しかし、学生は、淡々として単調なお講義の様であったが、三代治先生は、日本の経済学者の国際社会復帰を告げる、Miyoji Hayakawa "The Application of Pareto's Law of Income to Japanese Data," *Econometrica*, 1951, vol. 19-2、の著者と知っていたので、敬意を表して聞いていた。

一年次の経済概論が面白かったので、2年次に同じ長谷部先生の統計学を履修するつもりでいると、「今年、森田優三先生のお弟子さんが着任するはずであるから、それを履修した方が良い」と先生ご本人にいわれる。予告通りに竹内清先生が新任教員として着任、統計学を教わり、さらに高校教員用の統計学で中身は標本調査論中心の数理統計の講義を受ける。数理統計の科目は他に、武隈良一教授が担当され、これも単位を取った。

同じ年に新任教員として、経済変動論・経済学説史担当で杉本栄一教授の弟子の地主重美先生が赴任された。3年になると演習(ゼミナール)に所属するので、歴史にするかそれとも経済理論にするかずいぶん迷ったが、マルクス主義に失望していたので、地主ゼミナール志望で面接を受ける。先生に、「ドイツ語とフランス語の文献を読む気持ちがありますか」と聞かれて「一応準備はしています」と答えた。演習は輪読で、ヒックスの*Trade Cycle*を春学期に読まれ、夏休みには経済成長論のドイツ語の文献のプリントを渡された。秋学期にはジョン・ロビンソンの新著*The Accumulation of Capital*を半分ほど読んだところで先生は留学生として、アメリカに行ってしまう。大学当局と交渉し、杉本教授の弟子の北海道大学の早川泰正教授にゼミナール担当の先生にして欲しいと交渉する。大学当局は、「早川先生が併任教授になってくださるなら」という条件を出した。後で知ったのだが、国立大学間では、併任教授は、非常勤講師で無いので給与は出ない。給与を支払うには非常勤講師でなければならぬし、それではゼミナール担当の研究指導教員にはなれない。それを知っていて先生が承知したらといったのかどうかかわからない。ただ、われわれ学生が札幌に通うのならという条件で、先生は引き受けてくださり、卒業論文の指導をされた。「北大では、マーシャルの原理を読んでからケインズの一般理論を読むことにしている。君たちも読みなさい」と言われた。この早川ゼミの大学院生に戸島熙さん【後に小樽商科大学で同僚になる。故人】がいて、北大の院生に逆に小樽商大には、計量経済学・財務諸表担当の古瀬大六教授がいらしてその一般均衡モデルの微分方程式の鞍点問題解法が、*Econometrica*誌に載った意義を教えられた。敗戦後、早川先生のPareto分布の論文に続いて古瀬先生のこの手製のアナログ計算機による微分方程式の解法といった雑誌論文を読むことの重要性和日本人もやっと世界の学界に復帰したのだと教えられ、当時『経済評論』に連載された森嶋通夫の「オックスフォード通信」も教えられた。

卒業論文は、Steindlの*Maturity and Stagnation of American Capitalism*を読んで、成熟資本主義社会での経済変動過程に関する「怪しげな」モデルを書いて、1958（昭和33）年3月に小樽商科大学商学部商学科経済学専攻卒業で商学士となる。この間、武隈良一教授には、数理統計学の講義から始まって、講義外にケインズの確率論とノイマンとモルゲンシュテルン共著、ゲームの理論の手ほどきを受ける。これと竹内先生の指導が統計学の勉強のすべてであった。そこで標本調査法、標本設計も習ったが、私の数学のレベルは低く、線形代数と微積分の知識だけで、ボレル集合族もルベック積分も知らなかったもので、大学院に進学して鍋谷清治先生の学部での数理統計学の講義がボレル集合族から始まり、その講義の水準に驚いたが、これは後の話である。

このころ大学での友人（主として辺見武利・宮下徹・鈴木亮の諸君）との議論の焦点は、2年次の冬休み明け、すなわち1956年の2月のフルシチョフのスターリン批判・6月のポーランドのボズナン事件・10月のハンガリー動乱であった。歴史学研究会でのさまざまな議論が続いた、これらの世界の状況は中学生以来の社会のあり方の解釈の基準になっていたし、当時の支配的な風潮であったマルクス主義に失望させるきっかけにはなったのかもしれない。ただ、それはこの一連の動きだけが原因とは言えなかった。中学生の時に受けた加賀谷先生の影響もあったし、『フアーブル記』の山田吉彦と一緒に『昆虫記』を訳していた林達夫の名前に惹かれて、父の本棚から、『歴史の暮れ方』（1946年、筑摩書房）、『共産主義的人間』（1951年、月曜書房）も読んでいたことなども関係していたに違いない。何で読み始めたか、いきさつは忘れたが中野好夫訳のラスキの『信仰・理性・文明——ある歴史的分析の試みとして』（岩波書店、1957年）も読んだ。中井正一の著作を知ったのもこのころである。もし生まれるのが、一二年早かったとしたら、また小樽商科大学以外の経済系の大学に進学していたら、マルクス主義にもっと深入りしていたかも知れない。

思い返すときだみのると林達夫の二人の著作は出るたびに読んだし、第2次世界大戦前の刊行物は古本屋で探し求めた。多分雑誌に掲載された以外はほとんど手に入れたはずである。また小樽商科大学の当時の若手教授陣は、今思い出しても印象的である。喜多了祐先生は一橋に転出する直前で、それまで4単位だった商法を8単位にⅠ、Ⅱに分け、Ⅱを会社法に充て外観理論でマックスウェーバーとの関係を講義されるだけでなく、きだみのるの「掟」の翻訳の誤訳指摘など、デユルケムにまで発展した講義をされていた。藤沢正也先生のイギリス金融資本に焦点を合わせた金融機関論なども印象的であった。

教師も充実していたが、図書館も社会科学の文献だけでなく、文学を含めてよく収集されていた。中学生の読書の延長で、渡辺一夫を探すところラブレの翻訳の白水社版が揃っていたし、ボルケナウ『封建的世界像から市民的世界像へ』（水田洋・花田圭介他訳）みずず書房を図書館から借り出して読んで、他のボルケナウの著書はと調べるとPareto (1936, London) もきちんと入っていた。『歴史と階級意識論』のルカーチに惹かれてその原書を探すとこのドイツ語版も小樽高商時代の蔵書で入っていた。ただ日本文学の本は多くなく、同じ苗字の松田という人の寄贈文庫があり、内田百閒の稀覯書などが数多く入っていた。自分の手元にある日本人の文学作品としては、子供のころからの宮澤賢治・木下杢太郎に中勘助・森鷗外が愛読書に付け加わった（同じゼミナールの近藤貞次君に埴谷雄高を教わって読むようになった）。

1957年に神戸大学の大学院と一橋の大学院を受験する。神戸の面接は新庄博先生で、ドイツ語の貨幣論の文献を開いて「此のページを、声を出して読みなさい、その後で何が書いてあったか要約しなさい」との質問でした。要約はしどろもどろだったが、年号は正確に発音したので、独逸語は判っていると思われて合格したようであった。その時、神戸の市内を案内してくれたのが、戸島さんの友人の金子敬生さんであった。亡くなられるまで交遊が続いた¹⁰⁾。

一橋大学大学院での実証経済学と価値判断

一橋では数人の先生に面接された。上がっていたのか、どうも後でもどの先生であったか、お名前は判らなかつた。試験に合格した後、小樽商大の先輩で早川ゼミ出身の林武さん【アジア経済研究所を経て大東文化大学教授。故人】と天利長三ゼミの早見弘さん【小樽商科大学教授】にもお目にかかって相談した。どちらにすべきか迷ったが、結局、1958（昭和33）年4月一橋大学大学院経済学研究科修士課程に入学した。集中講義でなじみ深い山田雄三先生のゼミナールに入る。同じゼミに、塩野谷祐一、筑井甚吉、佐藤隆三の諸先輩がいて、1級上に小野旭、同期では藤野志郎・新田政則・松浦貞子のみなさん。演習は、輪読とそれぞれの研究の中間報告が交互にあり、Sraffa, *Production of Commodities by Means of Commodities*, 1960, Myrdahl, *Beyond the Welfare State, Economic Planning in the Welfare State and its International Implication*, London, 1960 などが輪読の対象であった¹¹⁾。

森田優三先生の博士課程のゼミから中退して経済研究所の山田勇教授の助手になった溝口敏行さんから、「北海道育ちは敬語が一段階少なすぎる、それで生意気だと皆にいじめられるのだ」といわれたがいじめには気のつかない晩生（おくて）であった。久武雅夫先生、山田勇先生（通称蟻地獄、一度出席すると大学院5年間出席しないと機嫌が悪いので、この名がある¹²⁾。）に出席、他に単位を取った講義としては、森田優三先生の統計学、計量経済学は磯野修先生でTinbergenの初期のマクロモデルから始まってKleinに至るマクロモデルの輪読で、きつい演習であった¹³⁾。講義は、都留重人、梅村又次、篠原三代平、石川滋、大川一司、馬場啓之助の諸先生。馬場先生には、「中井正一の京都大学時代の同人雑誌『世界文化』にお書きになつてますがどんなお付き合いだったのですか」とある時うかがったら、窓の外に遠くをまぶしそうな眼をされて見られて、「若いころのことで」と何も話されなかつた。古島敏雄先生の講義は日本の統計調査史と密接な関連のあるシラバスであったし、以前先生の本を読んでいたので、受講しに

研究室に行ったところ、困ったような顔をされ、「演習形式で講義はしないのだけれど」と断られた。

しかしそれ以外に、さまざまな専門と関係のない講義をもぐりで受講していた。小樽に集中講義に来られた時に感銘を受けた上原専禄先生の学部の歴史学講義ももぐり受講した。大塚金之助先生は停年ですでに慶応義塾大学に移っていたがその社会思想史は、大学院に入った年に旧知の加茂義一学長に招かれて小樽商大に集中講義にこられるということで、早めに帰省してもぐり聴講したことをおぼえている。夏休みが終わって津田内匠先生にお目にかかった折に「『小樽は屋根が黒く汚い街だ』と大塚先生から手紙があつたが、講義は面白かつたか」と聞かれてあまり面白くなかつたと答えたことを覚えている¹⁴⁾。経済研究所の津田先生とどうして知りあつたのか、今では記憶にない。経済研究所には杉本ゼミの出身、早川・地主先生と同門の宇津木正先生が助手でいらして、フランスの書誌学の文献（bibliographie）などを教わつた。ドルバックD'Holbachの研究家で、「手塚先生は偉い先生だったらしい。文庫を見ているとわかる」と教わつた。戦地で敗戦後イギリス軍の捕虜になり、アングロサクソン文化の欺瞞性が嫌になって、イギリス経済学史からフランス思想史に代えたといわれた¹⁵⁾。

修士課程・博士課程の通算5年間在学したので、永原慶二、西順造、香内三郎¹⁶⁾等々学部生用の講義も多くきけた。鍋谷清次先生の講義も前述のように受講したのは学部生用であつたが、私の聞いていた年は、いつの間にか学部生は一人もいなくなつて大学院生のもぐり聴講生達だけになっていた。本も専門と関係の無い、林達夫、森有正などを古書店で買いあさつて求める。きだみのると中村真一郎・辻邦生は出版されるとすぐに買い求めていた。専門書は、1 \$400円換算の洋書輸入価格であつたが、幸い銀杏書房の高田和さんが「あるときはらいの催促なし」でつけにくれたので、少し稼いだり、奨学金が出ると支払つたりしていたが、なかなか借金額に追いつかなかつたけれども、何とか欲しい

本を買うことが出来た。ただ後で就職してからも数年は借金が減らなかった。1960（昭和35）年3月には、学部の卒業論文の焼き直しで経済学修士になった。

博士課程に入学できたが、溝口敏行さんに、「自分は経済研究所助手に採用になって、博士課程は中退する。これまでの確率過程論は止めた、君もその程度の数学力では、経済理論を専攻するには向かない。実証研究に転じたら、一つ小野さんと南さんも誘って輪読会をしよう」ということでIDEA会が始まり、JASAとJRSSなどの雑誌から実証分析の論文を輪読した。モンローやフリーデンの電動計算機を使って単純な回帰計算を始めるようになった。

社会主義国家の現実の実証的研究

溝口さんは、山田勇先生の講義を受講しているのを見て、どこか気にいったのであろう。石川滋先生に頼まれたから統計学を多少知っている人間を集めて中国の統計の実態の解析と調査を始めるといったのはこのときである。石川先生には、論文の書き方から、懇切な指導を受けた。マルクス経済学で中国を研究する者は大勢いるが、統計数値に基づいて実証的に分析する者は日本では少ない。厚生経済学で名高いA. Bergsonはソ連経済の分析でも名高いのだと教えられた。研究会はアジア経済研究所で行われ、一足先にアジア経済研究所に就職していた小島麗逸さんや神戸大学出身の尾上悦三さんたちと知り合ったのもこのときである。中国の大躍進運動【1957-8】のための収穫統計等の誤報問題を扱った論文が、大学院の紀要『一橋研究』に書いた修士論文の要約の後で発表したものだが、実質的な処女作である¹⁷⁾。

安保闘争と同人雑誌『風土と論理』

その他に様々のことがあった。いわゆる60年安保闘争である。それも静まって、ロシア国民音楽派の研究で『音楽芸術』で新人賞をとり音楽評論家としてデビューした大塚明さんを中心にゲルツェン研究の藤井一行さん、国際私法の舩場準一さん、労働法の坂本重雄さん、会社法の青木英夫さん、憲法の山内敏弘さん、当時

はモンテニウ研究の高橋誠さん、エルベシュウス研究の廣瀬雅子さん、トインビー研究の本多久子さんなど一橋大学の大学院で鬱屈していた若者と、英文学の田中幸子・生沼和子・青木貞子さんなど津田塾大学に在学か卒業したばかりの人たちが集まって『風土と論理』という同人雑誌を始めたのもこの頃である。

雑誌を出した理由は、『一橋研究』という大学院の学生の機関誌を大学の補助金で出版していた。綺麗な雑誌にしようとレイアウト等体裁に凝っただけでなく、レフリー制の導入などを始め、退官された上原専祿先生の「学問と現実」と題する講演を収録したり、学生会の安保反対運動の記録を載せたりして、同人雑誌のように私物化していると批判の声がどこからか聞こえてきて、学生会の編集担当理事を退いた。文句を言われないように、自分達で金を出し合って出したい形で出そうということが端緒であった。何とか三号雑誌にしたいと四号まで出したが、それが最後になった。理由は、同人の多くが、それぞれ大学に職を得てしかも、任地は鹿児島から、静岡、東京、山梨、小樽と散ってしまっていて、自由に動けなくなったからである。たださまざまな社会科学分野の人との議論というのは知らず知らずに視野を広げてくれていたようである¹⁸⁾。

数理経済学とその限界

1963（昭和38）年3月に在学年限の終了の時期が来た。当時は、博士学位論文は旧制の名残で、なかなか卒業時に出すのは難しいということで、単位修得論文を提出して退学するのが慣例であった。個別財務諸表を利用してのマイクロデータによる投資関数の線型回帰モデルを三菱研究所の編集した上位企業の財務諸表データで紙バルブ産業を計測して、博士課程単位修得論文として提出審査を受けた。修士論文以来の寡占的な企業行動を仮定しての投資関数は、ケインズ以後の動態マクロ理論では説明しきれなく、加速度原理や速度原理ではなく、むしろシュンペーター的な企業家精神に影響された非合理的なものに左右されるのではなかろうかという視点から、方

法論的な問題提起とミクロ・データの解析で、個別企業を20期間プールして企業と時点の双方をダミー変数として入れた回帰モデルで、残差の分散分析を行い、当時としてはまだあまり手を付けられていない手法で解析したと思っている¹⁹⁾。

4. 図書館での収書と自分の読書のための 収集の始まり

汎用計算機の利用と図書館学

1963年の5月1日づけで小樽商科大学講師（計量経済学担当）に任用された。管理科学科が新設され、計量経済学を担当の古瀬先生がそちらに移られたためである。鷹揚な時代で、講義ノートを作成のために半年の内地研修を申し付けられた。当時の大学院は教授にならないと講義を担当できなく、倉林義正先生が、教授昇進で国民経済計算論の講義を開講されたので、それを聴講した。

国内研修の他に、当時図書館長をされていた古瀬大六教授の好意で、新任の若手教員の基礎となる文献の収集には特段の配慮がされていた²⁰⁾。

私は、確か当時の金額で10万円の特別枠をもらって、内地研修の間、時間を作って神田の古書店を歩いては、揃いの統計報告書は高価なので、端本の統計資料の中から当時の小樽商科大学の統計報告書の欠本になっていたのを集めることにした。図書館の田島候謙係長が丹念に私の依頼した主要統計報告書の欠本状況の書庫調査をしてくれたお蔭である²¹⁾。私の赴任後、小樽商科大学でも1年後輩でやはり一橋大学の大学院で森田優三先生に師事した神田祐一さんが助手で赴任して、統計報告書の収集・選別には協力してくれた。惜しくも奇禍にあって夭折した²²⁾。

小樽商科大学に勤務したのは10年間に過ぎなかったが、自分の思想の骨格が作られたと思っている。一つは、教授会の互選で図書委員に選ばれて、結局古瀬大六館長のもとで、汎用計算機を利用した図書館の近代化のために図書館・情報学を勉強したことである。今一つは、ヨーロッパ社会思想史の大きな流れのうちに実証的経済学の位置を定めることが出来たことである。

これは計量経済学の基礎である論理実証主義の研究にもつながるだけでなく、大学院時代に始めた中国社会主义革命と統計調査論の関連の研究にもつながったし、大学紛争時代の全共闘をはじめとする各種学生思想派閥との教授会構成員団交で学生たちと対峙して揺らぐことのない足場を固めることが出来たともいえる。

この間の大きな出来事は、Fulbright granteeとして1966—67の1年間、Harvard UniversityのGraduate Schoolに留学することが出来たことである。より正確には、1966年の夏休みにアメリカの避暑地であるBoulderにあるUniversity of ColoradoでColorado Economic Instituteという夏期講習会で英語の勉強のために暮らした後に、ボストンに向かったことになる。結局1年3か月の滞在であった。

手塚寿郎の経済学を通しての古典研究の現代的意義

このアメリカ留学の前に、手塚文庫目録整備の手伝いをしたことは、図書館・情報学の勉強とヨーロッパ社会思想史の勉強の出発点になった²³⁾。小樽商科大学には、フランスの重農主義研究家として著名なSchelle文庫があり、これは1921年から5年間パリに留学した手塚寿郎教授が小樽高等商業学校にもたらしたものであり、1958年から浜林正夫助教授の下で、一橋大学の津田内匠の協力を得て、目録を完成し、1962年に刊行されていた。この手塚寿郎教授の遺愛の文庫をSchelle文庫目録に続けて目録を作成しようということになっていた。この文庫は、入手の際に手塚先生の育てた司書の木田橋喜代慎（後に北海学園大学の図書館学教授）の手になる謄写印刷の目録のみが数部残っただけであり、その全容は知る人のみぞ知るという状態であった。この、再編・校訂作業は、後に形式的に坂田太郎教授の編で刊行され、実際は浜林正夫教授が指揮をして、編者には津田内匠・運塚忠躬（当時北海道大学文学部助教授。後東京大学文学部教授。東京国際大学大学院経済学研究科で博士課程を設置するときに招いて同僚になる。故人）が名を連ねていた。私は同僚の阿部謹也助教授

と札幌から通われる遅塚忠躬助教授と一緒に学生会館の和室に床一面に資料を並べて、目録作成の整理作業に従事した²⁴⁾。

小樽商科大学に赴任するに当たって、恩師の山田雄三教授に「君は古い文献を読むのが好きなようだが、経済学は科学なのであるから、新しい文献に目を通すようにしなさい」と諭された。計量経済学に没頭していた私のどこに潜んでいた学説史に対する好奇心を見抜かれたのか、今でも不思議である。あるいはG. Myrdal, *Das politische Element in der nationalökonomischen Doktorinbildung, mit einem Nachwort von Paul Streeton*, Hannover, 1963という学説史の本(『経済学説と政治的要素』)を訳されて、1942年に刊行されていたし²⁵⁾、またロッシェの翻訳もされていたばかりでなく、第2次世界大戦時に附属図書館長として、空襲を恐れてメンガー文庫等の疎開を陣頭指揮されていた先生自身に古典籍を愛好する癖があり、自戒の言葉でもあったのかもしれない。

山田雄三先生も手塚教授とともに福田徳三の弟子であったが、手塚教授が盛んに学会活動されていた当時は、まさに数理経済学の黎明期であり、ゴッセンの翻訳から始まり、そのワルラスやパレトに関する優れた論考は、日本における数理経済学の開拓者としての役割を果たしていたことは広く知られていた。ワルラスの『純粹経済学要論』の翻訳の上巻を上梓されたのは、ジャッフエの英訳のであるかなり前の1933年であった²⁶⁾。しかし、初期社会主義思想の研究発表も数多くあり、また貨幣廃止を志す計画経済は実行出来ないという視点からランゲの競争的社会主義にも注目していたが、その面の研究発表は、一時期からほとんど公表されなかった。当時の検閲制度の状況を考慮すると無理からぬものがある。筆者の推定では、ワルラスの初期の論考であるブルードン批判を読み、批判の対象であったブルードンを読み、その魅力に惹かれたものと思われる²⁷⁾。コレクションは初期社会主義からアナーキズムに至る膨大なパンフレットと文献の収集をされた。浜林教授が阿部・遅塚の二人に私を加えたのは、手塚教授の数理経

済学者の側面を重視して、計量経済学の担当の若手教員の私を思い出したのであろう。

この目録作成作業の間に木田橋喜代慎さんとお付き合いするようになり、手塚教授の論考を読み直して、改めてその視野の広さに心を奪われた。特に初期社会主義文献は、イギリスのOwen関係を除いては、手塚の収集は世界的水準であって、フランスに関しては極めて網羅的であった。私なりに手塚の収集の経路をたどると、数理経済学の日本の開拓者の一人として、Walrasの研究から、彼はサンシモン主義者の父親の影響を受けていることからサンシモン主義の研究に入りさらにその経済学者としてのデビューがProudhonの租税論批判であり、そこからProudhonを読み始めてのめり込み、さらに経済的自由主義との関係でのアナーキズムに及んだと思われる。したがってこの面の収書は1930年代まで及んでいた。この間の関係は、"Recherche déconomie politique du professeur Tedzuka et son mérite"と題して、日本語と仏文とが無署名で著作目録と一緒に、文庫の目録の巻頭に収録されている²⁸⁾。

また、手塚教授には、一足先に小樽高等商業学校の蔵書となったSchelle 文庫を拡充する意図もあり、その収集の中核としてのフランス重農主義と百科全書派の文献と研究書の集積は、百科全書で音楽の項目を書いたJ.-J. Rousseauのあらわした音楽辞典まで入っていた。数理経済学の日本における開拓者の一人であった手塚の蔵書の中にはフランスの土木工学者Dupuitの経済分析の文献なども網羅されていた。

この手塚文庫の整理の過程での手塚経済学の研究は、ハーヴァード留学時の聴講にも尾をひており、正規に履修して試験を受けて科目の他に、社会思想史や政治思想史の講義を聴講していた²⁹⁾。これは帰国した後の大学紛争での学生との討論のなかで、活かせるような気もしている³⁰⁾。この社会思想史と経済学説史に関する研究は、大学紛争のときの学生との対話に埋もれてしまい、他には、鈴木亮・佐藤茂行・広田明・松井幸子・木田橋喜代慎たちと計量書誌学の共同研究のための科学研究費を得ての報告書に書き散らした以外は1冊の書物にまとめることなく今日

に至っている。まあ、計量経済学的実証分析と計量経済史の研究の背後に隠れてしまったと言ってもよい。今となっては詳細に展開する時間もなくなってきたので、稀覯書もあることで、サンシモン主義の音楽家であるFélicien David関係を除いて寄贈するなかに含めることにした³¹⁾。

大学図書館のコレクション

その後、小樽に在任中に、元小樽商科大学教授で早稲田大学教授であった早川三代治教授が急逝されその文庫を入手した。他に、一橋に転出間際にイタリアのフエルトネリ研究所の関係でサントネルのサンシモン主義とフーリエ主義のコレクションが売りに出た。このうちの手塚文庫と重複しないものを大西・手塚記念文庫として同窓生の基金で入手設立したり³²⁾、小樽商科大学教授の古瀬大六教授の父親で一橋大学名誉教授古瀬良則の英米文学の蔵書を没後同じく同窓生の基金で入手した。これは正確には一橋大学転出後である、さらに同僚の南亮進さんの父親であり人口論研究者として知られた旧小樽高等商業学校教授の南亮三郎文庫を小樽に入れるべく骨を折り、実現させた。

大学図書館というのは少なくとも100万冊の蔵書がなければ人文諸学・社会科学の場合には研究者の育成には役に立たないというのがボーモル達のアメリカの大学の蔵書分析の結果とみなすことが出来るし、それは、フルブライト留学生としてのHarvard University滞在と、内地研修での一橋大学での経験でもあった。それらの期間を除いて、ほぼ10年間の小樽商科大学の勤務で、図書委員と予算委員を務めた時に、大学の目標である大学院の設置を考えるならば附属図書館の充実が急務であると考えていた。修士課程の大学設置審議会に出した主要蔵書目録は、当時図書館長だった藤井栄一教授が独力で作成したが、それを通読して何が欠けていたかを知ることができた。その判断は、アメリカ留学中にハーヴァドの各種図書館をあさったり、Columbia University, New York Public Libraryを見せてもらったりアメリカ合衆国議会図書館の中国文献をつぶさに点検する体験したことと、木

田橋さんや川原和子さんたちとヨーロッパの社会科学系の図書館と国立図書館等を見学する機会を得たことが大きい³³⁾。

歴史統計の研究動機

話が前後したが、小樽商科大学での教師時代には、大学院生時代の研究の延長としての投資関数の計測を「法人企業統計調査」の集計量データで試みている他、マイクロデータの解析を試みたくて、資料が手に入りしかも統計法の制約のない歴史資料に着目して、「工場表」の再集計を試みた。これは、山口和雄が北海道大学に赴任して、歴史資料がなく、いろいろ考えて開拓使から札幌農学校を経て受け継いだ府県統計書の膨大な未整理のコレクションに着目して、東京大学に転出するまでコツコツと府県統計書の会社表と工場表の再集計を試みた例に倣ったものである。方法的には古島敏雄先生の影響から発している。これは後に一橋大学に転出後も続くテーマに拡張していった。マイクロ・データに戻っての再集計の試みである。この二つが社会思想史の研究と図書館情報学の研究と並んだ大きな研究テーマであった。

中心はようやく利用可能になった汎用計算機を使用しての統計学の応用でもあったしまた他方計量経済学の方法論的基盤の研究として論理実証主義やカール・ポPPERの本を読み漁った。これは大学院時代の佐藤隆三さんの影響と古瀬大六先生の影響でもある³⁴⁾。

大学紛争と小樽商科大学からの転出

小樽商科大学から転出することになった背景には、大学紛争が小樽商科大学にも押し寄せてきていて臨時の学生対応の学生部委員となり、各種の学生の党派を相手に教授会構成員団交の準備をしたりして日を送っていたことがある。大学は封鎖され、授業は小規模大学であったので、市内の施設を借用したり、私の講義と演習は参加者が少ないので、自宅に学生を呼んで行った。一橋大学と同様に徹底的な話し合い路線であったので、何度も各派の学生との討論集会を行って議論した。(1966年からの中国文化革命、1968年のフランスのバリでの5月革命の尾を引い

て、学生の理想社会追及の論理に対して、それは1930年代のランゲ等の経済計算論争以来の経済計画の可能性の問題に帰着するとして、ソ連と中国等の社会主義の非効率性に関してはデータに基づく実証分析で決着がついたという立場である。) 中国の毛沢東主義の大躍進運動【1957—58】の失敗、ソ連の社会主義の経済政策の失敗をはじめ、歴史的な社会改革運動の失敗の歴史をどう読み解くのかという視点から、学生を説得しようと試みた。これまでのヨーロッパ社会思想史・政治思想史の解釈で自分なりの理論化を試みていた。

国立の単科大学であり、学生部長が学部長の役も勤めて一番ex-officioで委員会に出る会議が多かったといわれていたのであるが、自分の委員会出席の延べ時間は計算してみると学生部長のそれを上回る状況であった。母校であるので便利に使われた側面もあったし、自分でも母校がよくなれば良いという気持ちもあったので言われるままに走りまわっていた。しかしそのような状況を漏れ聴かれて石川滋教授が「一橋の経済研究所附属日本経済統計情報センターに教授の新しいポストが出来た。今の助教授が教授に昇格した後のポストに来ないか、今までは教授ポストのない部門であったのが増員になったので、少し昇進が年齢バランスで遅れるがどうか。今のままでは研究者としてはつぶされてしまうのではないか」とのお誘いであった。

迷ったが、手塚教授の遺稿集を編集することと北海学園大学の図書館学の教授になっていた木田橋さんが、手塚先生の遺志を継いでワルラス書誌の編纂と社会科学分野のbio-bibliographical annalsの編集を計算機可読型でできないかという共同研究をしていたことでもあり、手塚文庫のそばにいたいという気持ちが強かった。同時に小樽出身の長老教授で手塚先生の弟子と自認される方が、私の手塚理論の解釈とサンシモン主義の流れのなかでのワルラス解釈に異を唱えられ、「そんな社会主義者なはずはない」ということで、木田橋編のワルラス書誌に付した私の序論にも異を唱えられ、松尾先生が仏訳をしてくださったが、それを撤回したいと先生にいわれ、

英訳しなおして出すのも躊躇われて、結局出版が中絶することになった。このまま小樽にいたのでは手塚教授の遺稿集の編集刊行も無理ではないかと思うようになっていたので、最終的には転出することに決めた³⁵⁾。

一橋大学に転出すると、今度は赴任する前には聞いていなかった新たな制約が藤野正三郎センター主任から遠慮勝ちに申し渡された。当分の間、日本経済の現状分析にあたる投資関数の研究は中止して、大川一司プロジェクトの系譜につながる歴史統計に専念して欲しいとのことであった³⁶⁾。特に汎用計算機を使用してのデータバンクによる新しい研究形態の根拠地にしたいということでもあるので、計算機による書誌情報の研究は関連研究として黙認するということであった。それは科学研究費を申請して一橋大学の外の研究者との共同研究で続けることになった。UNESCO International Committee for Social Science Documentation and Information の委員に就任することをMeyriat教授から依頼され、たびたびヨーロッパなどに行くようになった。ただ、non-governmental organization であるということで、旅費が出るわけではなく、私費渡航で往生した。発展途上国は、委員会は旅費を支給するが、日本は発展途上国にみなされなかったためである。ヨーロッパの旅には、最初Bedekaの1900年代の初めのころのものを日本の古書店で求めていたのでそれを持って行って、現地で地図の入ったガイドブックを求めるようにしていた。いわゆる東欧圏はガイドブックも地図もあまり十分でないこともあったが、それよりも二度の大戦を経ての国境の変動に興味があったからである。後にはMichelinの赤・青・緑の3種類も愛用するようになり、Bedekaと引き比べていた。Bedekaは良くできていて、2重言語の国では、2種類の言語表記の地図が添えられていた³⁷⁾。

研究分野の拡張：所得分布と文化経済学

この他に、溝口敏行教授が日本の所得分布の歴史的分析とアジアの発展途上国の所得分布の研究に誘ってくれて、各種の科学研究費を獲得して、共同研究を進めることになった。溝口さ

んと共同研究は、長いこと各種に亘っていた。³⁸⁾ また石川滋先生の推薦で、昔のアジア研究所の石川委員会の発展で小島麗逸さんが主査の研究会にも参加することになり、後に詳述するように新中国の経済統計の研究が再開できた。今一つこれまで手掛けなかった領域は、文化統計であり、倉林義正教授のオーケストラの聴衆者調査をはじめることになった。これは文化庁芸術課の依頼で大掛かりな芸術文化統計の整備事業に連なっていく。芸術も文化の一環であり、学問の社会史の研究にも発展させることができた。³⁹⁾

この研究分野の拡張は、自分の主観的には二つの軸で構成され、それなりに統合されていたつもりであった。一つは、これまでの経済学の実分析の焦点が財貨の生産であり、金融業と商業を除くとサービスの生産には焦点が合わせることが少なく、しかもサービスの生産は、フロアの側面とストックの供給するサービスという測定上難しい問題を無視できないという困難さに対して興味がそそられたからでもある。郡司篤晃教授を主査に、厚生省関連組織に所属する統計関係者（府川哲夫・伏見恵文他）を中心に、老人医療レセプト・データの個票で老人医療費の分析を行ったのも、その一つである⁴⁰⁾。

しかも対象から言って、狭義の経済学ではおさまらず社会学・政治学との境界領域を形成するからでもある。この面からは、図書館・情報学と書誌学が小樽商科大学時代からの延長としてなされた。図書館に対する関心も、舞台・演奏芸術に関する関心もいづれも公共財としてのストックとしての文化資産の蓄積とその提供するサービスをどうとらえるかという問題と表裏一体である。（哲学専攻の友人に教えられながら、中井正一を読んだのが思想的支柱になっていた。中井の「委員会の論理」（初出『世界文化』1936年）は苦勞して探した記憶がある。）

今一つの軸は、ミクロ・データによる解析であり、しかも複数の調査等に基づくデータのリンケージという発想であり、これは、これまでの統計的研究の一貫した方法論であり、この後の様々な研究の通奏低音でもある。

社会経済思想史のコレクションの形成

ところで、小樽商科大学の附属図書館に対しては、転出後も愛着が残った。在任中は大西猪之介、手塚寿郎の作成したコレクションが十分研究図書館としての核になることを知っていたので、上記の各種のコレクションで補強することを私なりに努力してきたからである。努力の主力は、図書予算の増加とそれらの図書費は通常の各研究者の研究に充てることにして、特殊のコレクションの購入等は同窓生の基金で賄うことであった。この協力は転出後もしばらく続けた状況は先に述べた。

その際に補充すべき重点は、欧米の社会経済史と文化史の刊本資料であった。経済学説史は講義科目としては開講されていたが、社会思想史は専門家も講座も開設されていなかった。小樽商科大学の附属図書館は、大西の遺愛の図書のなかにCustodiも揃っていたし、それに続く文献群は手塚文庫の中にあつたからである。

私の去った後のフランス関係の資料の追加コレクションで記憶に残るのは、「フランス革命史資料」であり、当時日本経済の高度成長の終息期であったがドル減らしのために文部省が比較的海外コレクションの収集に好意的であった時期で、私の文部省の担当部局への助言が何ほどか有効であったのかもしれない自分では思っている。これでフランス啓蒙主義からフランス革命を経て20世紀のアナキズムに至る社会思想史の一次資料は世界的に見ても系統的に揃った研究拠点の一つになったと言えるであろう。ただ、当時陸続として復刻された18世紀のフランス貴族のメモワール類と文学書は不足であることは判っていたが、そこまで図書館で集めるように勧めることは出来なかった⁴¹⁾。

自分の専門領域ではフランスの統計資料も不整備であったことは知っていたが、いかんともしがたかった。理由は簡単で、自分の専攻の計量経済学の担当者として実証分析のための資料としては、長いこと系統的な収集が放置されていた日本の経済統計の再収集が、他の教員と学生の利用を考えると急務であったからである。一橋に転出後、会議でパリに出るたびに、自分

の関心を持った企業統計と文化統計に関する調査報告書類を多少は集めてきていて、今度の青森への寄贈書に含まれている。Unescoの関係で海外の会議出席の機会に、自分なりのコレクションの形成を試みた。金なしの古本屋での資料の収集の技術は小樽時代に会得したと言える。最大の武器は、どうも欲しいと思うことらしく、欲しい本は本棚で本の方が呼んでくれるということらしい。端本を見逃さないこととその国の言葉で書かれたものでないのを探すことである。このことは、サバティカルで1981—82年に再度ハーヴァードの日本研究所の訪問研究員になったときにも実行していた。かつての指導教授のPerkins が引き受けの手配をしてくれた。この時には再度、Perkins 教授やDorfman教授の講義に出席したが、昔はおられなかったGriliches教授の講義に接することが出来、自分なりの統計調査体系論を深めることができたし、センサス局・労働統計局を調査訪問したり、イェールのRuggles教授に教えるを受ける機会に恵まれ、データリンケージの新しい動きを教えられた。その結果、カナダ統計局まで足を延ばすことになり、そこで得た知見の延長が後に『企業構造の統計的測定法』（岩波書店、1991）に発展する糸口になると同時に、帰国後統計審議会の専門委員として、多少とも日本の統計制度の発展に貢献する糸口になった⁴²⁾。

統計資料収集の基本的な考え

これらの研究は、本来の業務である日本の統計資料の系統的収集の仕方にも役立った。小樽商科大学時代と異なり、一橋大学経済研究所の附属日本経済統計文献センターでは、より大規模に系統的蒐集を実施することが出来た。毎年の概算請求で、特別な予算枠の獲得書類書きと文部省の折衝にも努力もした。梅村又次・溝口敏行教授達と科学研究費も獲得して、金銭的にも小樽時代と比べて恵まれた。しかしそれだけでなく、小樽商科大学時代からのお付き合いで、経済資料協議会の協力、特に当時京都大学経済研究所助手の前田昇三先生の知遇を得て、系統的に経済統計資料の研究と所在調査のために、

主要な経済学部図書室を歩くことが出来た⁴³⁾。

自分の蔵書としても、統計資料は重要である。ただそれは、単に統計報告書を集めるのではなく、統計審議会の専門委員・正委員を務める間に各国の統計改革の流れと日本との落差に気が付いて、統計調査制度の資料も集めるようになった。それらの重要な資料は、統計調査法規と調査票様式と集計様式に潜んでいることにも気が付くようになり、自分の関心のある分野の統計報告書の収集の際にはそのような、調査のメタ情報の収集にも心を配った。中国の統計調査の研究と並行して、フランス・カナダに資料収集に気を配った。ドイツは友人の当時九州大学経済学部の浜砂敬郎教授が丹念に集めているし、英米は誰でもが集めているから必要がないと思ったし、将来は小樽商科大学の資料収集の弱点であったので寄付するつもりであったからである。これも今回青森公立大に安住の地を得ることになった。

問題はそうにして集める統計資料が果たして利用者の必要に合致しているかである。この点を明らかにするために研究者を集めてのシンポジウムの開催と大規模な統計データの需要動向調査を行った。後者は、1982—84に掛けて日本統計文献センターで行った大学の研究者を対象としたものと、統計審議会の援助で全国統計協会連合会を通しての上場企業の調査と地方自治体の部局の3種類の主体を対象として行った。上場企業の場合にはどの部門かを調査票と具体的な調査名を問う調査票の組み合わせで、集計は調査名ごとの名寄せ集計もあり周防節雄が分担してこれまでにない全面的な調査と集計を組み立てた⁴⁴⁾。

ここで明らかになったことはマイクロ統計データに利用の側面で日本は欧米に著しく遅れているという実態であった。この調査で得られた結論が一橋大学での統計文献センターのあり方を大きく変える方向付けの契機となったと言える。統計審議会での新旧2回の統計行政の中・長期構想の立案の時の一つの焦点ともなった。特に2回目の新中長期構想では、正委員として発言し実施へと推し進めることが可能になったので、日

本学術会議経済統計研究連絡委員会の当時の大屋祐雪会員の努力でミクロ統計研究の重点領域を立ち上げる活動を行うことが出来た。多くの研究者の協力で最終的には『統計情報活用フロンティアの拡大：ミクロ・データによる社会構造解析』（統計情報研究開発センター、1999）としてまとめあげ、その他に『講座・ミクロ統計分析』（第1巻—第4巻（既刊）：共編者として筆者の他に、浜砂敬郎・森博美、美添泰人・伴金美、清水雅彦・舟岡史雄、垂水共之・近藤健文）などと数多くの科学研究費の報告書を刊行した。

この重点領域・特定領域に至るまでに理系のいくつかの重点領域に参加し運営方を勉強する機会に恵まれた。浅野長一郎・丘本正の幹事役をされた一連の計算機を中心とした研究組織やこれまで『統計学辞典』（東洋経済新報社）の編集で一緒にした竹内 啓が代表の重点領域研究である。これらの科学研究費報告書関係のコレクションも蒐集の一つの核をなしている。

中国研究への統計資料収集方式の応用

石川滋教授に勧められて自分の大学院時代に手を染めた中国統調査制度の検討は、畏友小島麗逸主査の委員会で行った。そこに持ち込んだのは、日本の統計行政と統計調査の検討の方式の応用であり、統計調査の操作概念としての基本調査単位から諸統計調査の体系を系統づける方式と統計調査で使用する各種の操作概念の明確化であり、中国の統計調査体系を明らかにするのに多少の貢献にはなったのではなかろうかと思う。この委員会の研究の副産物の『中国経済統計方法論：変容と現状』（1987）として刊行して、発展途上国研究奨励賞を1989年に受賞することが出来た。また中国国家统计局の方たちとの付合いの端緒となり、中国の個票データの解析プロジェクトを日中共同研究の形で発足させたり、改革開放後の統計制度改革のために事業所名簿の整理につながる中国国家统计局の「統計単位普查」設計への協力などが展開した^{49）}。

自分の収書の客観的評価

結局、自分の収書は、多岐に渉る割に必ずし

も網羅的でも体系的でもなく、それぞれの勤務校での収書の落穂ひろいの感がぬぐえない。ただ計算機処理の方法論を中心眺めてみるとそれなりの体系がないわけではないし、学問研究が社会のあり方と切り離せないという立場からの収書であると考えれば、社会科学がその時点時点のタブーと言論統制をかいくぐって公表されている資料を集めている点でも多少のまとまりがあると思う。

この他に、森田優三先生がご自身の文庫の処理を筆者に託され、出来るならば一橋にというのであった。ただその文庫は最終的には一橋大学との重複分は一橋に残せなく、それを青森公立大に入れる松田蒐集の一部として、森田旧蔵文庫として含めることが出来た。

その結果、ドイツを中心とした社会統計学派の資料が含まれた。さらに長年一緒に共同研究をしてきた木田橋喜代慎教授の蔵書を、教授の没後に、みき夫人の好意で加えることが出来た。これらが入ることによって、おおよそ明治中期以降の社会の変化を物語る資料が入手できたことになる。これは、青森公立大の様に第2次大戦敗戦後もかなり後になって設立された大学にとって意義があると信じている。さらに当初予定していなかった財団法人統計研究会の施設縮小に伴って、研究会のこれまでの研究会の研究報告書類の寄贈を受けることが出来た。これは経済安定本部時代からの各種の省庁の委託研究の委員会報告書が中心である。

これらの蒐集書を次の世代に生かして欲しいという願望が、まとめて寄贈する気持ちになった理由である。特に欧米の稀覯文献やパンフレットに留まらず日本語の報告書の類は、国内の古書店で処分しようとする二束三文であり、しかもせっかくのまとまりを生かすことも難しい。拾われたものが古書店に流通すると今度は、馬鹿高い値がついてしまっただけで好事家以外は手が出せなくなるというのが残念ながら日本の実状である。

謝 辞

蒐集書と関連しては、図書館・情報学で教示

を得た人を挙げるべきであるが、別稿「岐路に立つ大学図書館」に記したので、再度記すことは避けた。また、本稿は筆者の研究史でもあるので、本来なら、これまでの研究者としての道筋での生活史で多くの教示を得た方々、特に長期に亘る期間にデータ整理等に従事して頂いた多くの方にも、この機会に言及し謝辞を記すべきであるが、それぞれの著書・論文を書いた折に謝辞を捧げているので、ここでは狭義の本を読む上での言語【広義】等の教示をいただいた方は記す折がなかったので、ここで改めて謝辞を献じる。残念なことに*の方以外は、過半は鬼籍に入られた（敬称は略させていただき教えを受けた時点の順に配列した）。英語の大竹延寿、盛山忠彦、木曾栄作、速川浩、白川芳郎*、飛田茂雄、ドイツ語の前田利道、G. Huber、中川勇治*、フランス語の松尾正路、中国語の川上久寿、ロシア語の松本忠治、言語のひとつとしての論理学・数学の加賀屋利政、武隈良一、戸島熙、穂鷹良介、日本語の芦田恵之介、小田観螢、森定雄、廣田二郎*、そしてわが父、宗一郎。ここで若いころの日本語を幾度も添削して下さった石川滋*、佐藤隆三*、溝口敏行*を加えたい。音楽に関しては、谷川有年*、大塚明、絵画・画像に関しては、若松六弥、若松美黄*、守分壽男。なお本文中、若き日の友人で、本稿の読者には、なじみが無く文脈で判らない惧れのある人名に関しては最小限の割注を付したが、原則、それぞれの方の一番長い期間勤務された所を記すに留めてある。最終勤務先や名誉教授等の称号は、本稿での文脈と関連するところが少ないのでほとんど省略してある。また紙幅の関係で触れない人や事柄も多いことを記してお詫びしたい。なお、初稿を、金城ふみ子、松田潤、熊谷苑子の諸氏が、抄録をM. Shaw氏が読んで、幾つかの不備と誤りを正すことが出来た。

（2010年12月15日受付、2011年1月26日受理）

注

- 1) 山本有造教授の岳父の故石田興平教授（1905－1988）は山本安二郎教授とともに建国大学で教鞭を

とられた小樽高等商業学校出身者の一人である。石田は、1925年の小樽高等商業学校軍事教練事件で無期停学処分になったが、後に京都帝国大学経済学部に進学した。手塚寿郎教授の教えた母校出身の研究者の一人として、筆者はその名前は存じあげていたが、旧知の山本教授の岳父とは石田教授が亡られるまで知らなかった。早く知っていたら機会を作って色々教えていただきたかったことがあった。ここで言及した目録は、[滋賀大学経済経営研究所]『滋賀大学経済経営研究所蔵 石田[興平]記念文庫目録』（2005）である。序文には「京都大学人文科学研究所山本有造研究室作成目録を基礎とする石田興平教授（1905－1988）旧蔵資料及び山本有造収集資料追補」とある。なお、関連文献に、山本有造「石田興平博士と石田文庫」『経済史研究』第7号、2003、[解説全般は阿部安成、なお伝記の一部は江竜美子]「〈資料紹介〉滋賀大学経済研究所資料調査室報⑩-XI「石田記念文庫」について」『彦根論叢』354号、2005）がある。

- 2) 私の昔からの友人のAさんは、最小限の趣味の本を残し、専門書は自宅の近所の母校であり勤務先でもある某大学の附属図書館を利用することにして蔵書を処分した。大学院生時代の付き合いから始まり、2度同じ大学に勤務した阿部謹也さん（一橋大学教授）が存命だったら自慢の書庫に集めた文献をどうしただろうか、急死されたので、存念を聞く折を無くした。彼の依頼で留学先のハーヴァード大の貴重書書庫から探していた文献を見つけてマイクロフィルムを取って送ったことなど思い出している。ただお弟子さんも大勢いるので、いづれ何らかの文庫として保存されることであろう。

小樽商科大学以来の友人で名古屋大学の水田洋教授に師事した鈴木亮さん（佐賀大学教授）の蔵書は、私が東京国際大学大学院経済学研究科長として博士課程設立の準備をする際に、破格の安値で遺族から頂きしかもその購入経費の大部分も整理のための目録作成費に充てさせてもらったので、ほとんどただで寄贈してもらったに近い。Smith研究家でもあるので、その蔵書は、附属図書館のHume Collectionがあり、その補充の役も果たせると判断したからである。東京国際大学の附属図書館はこれで一つの核が補強されたことになる。

- 3) 日本学術会議では、長いこと経済統計研究連絡委員会の専門委員と図書館・学術情報委員会の専門委員を務めてきた。連続3期までという規則に「余人を

持って代えがたい時は延長できる」という条項に該当するというので、確か4期続けて務めた。その間、名和小太郎さんの知遇を得た。日本学術会議の正会員になった後はそのような関係で学術情報基盤常置委員会の委員長を務め、法学の野上修一、歯学の堀内博、考古学の藤本強などの会員諸氏の助言とまたさまざまな議論をする機会に恵まれた。ただ、当時の学術会議という組織は、専門委員の視点から見た時と会員で見た時では、大きく異なっていた。学術会議は、当初の直接選挙制から登録学会推薦へと変わった段階で大きな変容を経たが、さらに第18-19期に第2回の大きな変容をこうむった。その改革経緯とその意義はいまだに納得が出来ないし、政治的背景について思うことがないわけではないが、その問題は当面の課題と関係がないので論じない。

4) この議論は、別稿「岐路に立つ大学図書館—電子化と定員削減の渦のなかで—」で論じたことの背景をなすものである。すなわち書物による伝承には限界があるのではないかとこの頃は痛切に思うようになったからである。直接的に感じたことを伝えるのは、どうも三世代、約百年くらいではないかと思うようになった。その時に途中にどのような伝統の継承の断絶があるかが問題である。例えば、筆者の在学したところの小樽商科大学は、専門科目の教員は東京商科大学の出身者で過半が占められていたのでその伝統も継承されていただけでなく、終わりのころの学年には加茂儀一という東京工大教授である、レオナルド研究家でもあり家畜文化史の研究者でもあった異彩の人を学長に迎えて、実学の一方の雄の東京工業大学のあり方の一斑に触れる機会があった。その点で、実学の伝統のなかで育ったといえる。杉本栄一『経済学を学ぶ—何をいかに学ぶべきか』（理論社、1952年）のドイツ留学時代のゼミナールを語った文などは、彼の経済理論の諸著作とならんで学生時代の愛読書であった。しかし学生時代に同じように愛読した丸山真男や大塚久雄の諸著作とどこか微妙に異なっているような気がしていた。後のことになるが水田洋『ある精神の軌跡』東洋経済新報社、(1978)を読んでそこに書かれている東京商科大学に連なる回想は極めて素直に理解できた。そこで西洋思想の伝承の仕方は、東京帝国大学と京都帝国大学が、第二次世界大戦を控えて日本の第二の鎖国時代に入る前にそれぞれ大きな学内の言論の自由のあり方を巡って、どのように翻弄されたのかと密接に関係しているのではないかと考えた。

1925（大正14年）の普通選挙に実現と引き換えに治安維持法の公布、陸軍現役将校の学校配属令、翌年5月に「学生の社会科学研究禁止」の文部大臣通達がだされ、いわゆる大正デモクラシーの終焉があり、その後の日本の学問研究のあり方は大きく変わった。すなわち、体制批判のマルクス主義であっても、また天皇機関説に示されるように体制の合理的理論づけであっても、社会の合理的批判精神であろうともその存在のすべては、官僚組織の育成としての官許の学問を伝承すべく位置づけられていた帝国大学の学問は、実学の学問だけが要求される非帝国大学系の学問伝統と違うという側面が露骨に出現したと思われる。古くは東京帝国大学では1920（大正9）年森戸辰男事件、1935（昭和10）年美濃部達吉の憲法学説が天皇機関説として批判される、1936年に『日本資本主義発達史講座』（1932年刊行開始）の関係者の一斉検挙（山田盛田郎、大塚金之助（東京商科大学）等）、1937年には矢内原忠雄事件、結局1938年には教授グループ事件等々の事件の余波で河合栄次郎の著書は発禁になり、1939年には平賀譲総長による平賀肅学が発生した。他方、京都帝国大学では、1933（昭和8年）に滝川幸辰教授の『刑法読本』『刑法講義』の発禁に伴い免官となり、いわゆる滝川事件が発生する。これら一連の事件は、海外留学適齢期の若手教員に、欧米留学経験の伝承に断絶させる時期になった。様々な理由で若い時に海外留学の機会のなかった丸山・大塚達の欧米美化に対して、少なくとも水田は第2次世界大戦の期間に日本軍の占領下であるとはいえ、外国の地に身を置いており、その西欧社会の植民地支配の有り様を通して欧米文化を活字ではなく、ということは理想化することなく知る機会に恵まれた（これを恵まれたと呼ぶと異論が出そうであるが）ことが大きかったのではないかと考えている。同じ帝国大学でも、森嶋通夫の自伝と高橋哲雄『先生とは何か：京都大学師弟物語』（ミネルヴァ書房、2010）の描く京都大学は、これまたどこか違うという気持ちがないわけでない。『アーロン収容所』でイギリス軍の日本軍捕虜に対する偏見を述べた会田雄次『アーロン収容所：西欧ヒューマンイズムの限界』1962年（中公新書）が、占領軍である戦勝国の実態にメスを入れた書物を上梓している。後に本文で述べる宇津木正先生からも、捕虜収容所時代につくづくイギリス思想史の研究をする気がなくなり、フランス思想史に転じD'Holbachの研究を始めるきっかけになったことをうかがったことがある。

これらの学問の形成と伝承のあり方についてはさておき、今一つの争点は、マルクス主義とスターリン主義につながるソ連邦形成過程をどう理解するのかとアメリカ占領軍の占領政策の実態をどう理解するのかとである。前者は、日本のみの問題でなかったことは、イギリスのケンブリッジ大学の学生の左傾化や、スペイン内乱を想起すると二〇世紀のヨーロッパ社会でも社会主義をどう見るかの問題は残っていた。

一橋大学の歴史と学問に関しては、一橋大学に転出後、経済研究所選出の大学史委員会の委員として史料集の編纂にも関係した。その結果、後に大学史の短い通史の1章を書くことになった。松田芳郎・尾高煌之助『戦時体制下の学問と教育』『一橋大学百二十年史：Captain of Industryをこえて』（1995、一橋大学[私家本]）。なお、杉本栄一に関しては別稿がある。松田芳郎「近代経済学者の偽装（転向）の論理：近代経済学定着史断章・杉本栄一」『風土と論理』2、1963、1-4ページ。

- 5) かつて竹内啓との対談記録（竹内啓・松田芳郎「統計データと社会科学」『経済セミナー』1988年4月号（399号）73—84ページ）で多少触れることはあった。
- 6) ソ連の日ソ不可侵条約の通告なしの廃棄とそれに続く日本に対する蛮行は、ひそひそと話されていたが、活字になったのは敗戦後少し日時が立ってからである。高杉一郎『極光のかげに：シベリア俘虜記』（目黒書店、1950刊行当時は未見、新潮文庫、1951、新版、富山房百科文庫、1977）であった。ただここでの社会主義社会の留保付きではあるが肯定的評価は、そのころ愛読していた竹山道雄の一連の随筆・評論との整合性に思いまどった。より体系的にスターリン主義を知ったのは後年のことである。高杉一郎も後年の一連の文献はまた別個な記述があり、その片鱗は『極光のかげに』の富山房百科版の追加収録に現われている。特に、337—8ページの1957年追記。高杉のその後の主要著作は、『スターリン体験』岩波書店、1990（同時代ライブラリー）【『わたしのスターリン体験』解題改定版、岩波現代文庫、2008】、『シベリアに眠る日本人』岩波書店、1992（同時代ライブラリー）、『征きて帰るし兵の記憶』岩波書店、1996、（岩波現代文庫版、2002）と内村剛介の一連の書物（『生き急ぐ：スターリン獄の日本人』三省堂、1967他）である。奇しくも内村の『わが身を吹き抜けたロシア革命』（五月書房、2000）が陶山幾朗の編

で出た後、高杉の『あたたかい人』（みすず書房、2009）も、太田哲男の編で出た。

- 7) このアメリカ占領軍の検閲の状況を最初に分析したのは、江藤淳『閉ざされた言語空間：占領軍の検閲と戦後日本』（1982）である。占領軍の検閲のことを知ったのは、本文に記したように亡父宗一郎への飯田広太郎の手紙である。飯田は宗一郎の札幌師範学校での先生の一人であり、作文教育の仲間の一人であった。同人雑誌『国語と人生』を主宰していたが、後1940（昭和15）年3月北海道庁視学に就任、すぐに4月の「北海道綴方教育連盟事件」の責任を追及され辞職。軍事援護会事務嘱託として生活するが、敗戦後は軍事協力者として占領軍に追及される。手紙が占領軍の検閲対象者になったのはその故であろう。日本の戦時体制に入っていく過程の手紙の検閲は組織的にはなされていなかったようである。断片的な大人たちの話を聞いていると、二二六事件、五一五事件の後に、父の「潮音」の歌人仲間の所三男【徳川林政研究所員】から新聞に書かれていない急速に難しい状況になっていく社会情勢についての手紙での連絡が時々あったようである。しかしこのころの手紙には検閲の跡はなかったようである。戦時体制下での大人の話は、小耳にはさんでも何のことは判らなかつた。

いわゆるソ連圏に組み込まれた東欧諸国においては言論自由が封鎖されていたのは、ファシズム社会と同様であったが、それを批判したいいわゆる西欧諸国も行っていることは同じである。日本もアメリカの占領下で同じ状況が出現していたが、これは検閲と発禁とを行っている点では同じであるように一見見えるが、その事実自体を覆い隠していたという点で、より悪質であると言えよう。同時代の記録としては、石川滋・水田洋・山田秀雄と一緒に「一橋新聞」の編集部にいた村上一郎の未完の回想記『振りさけ見れば』（1975、而立書房）でGHQの弾圧で日本評論社から退社させられる記述が詳しい。

- 8) 社会主義諸国の実態に対する疑問は、本文に記すように父の書棚にあった林達夫のスターリン主義批判の諸著であった。林達夫『共産主義の人間』（月曜書房、1951）、『反語的精神』（筑摩書房、1954）、『歴史の暮れ方』（筑摩書房、1968）である。これも父の書棚にあったのが、ジッダの『ソヴェト紀行修正』（堀口大学訳）（第一書房版、1937）と『ソヴェト旅行記』（小松清訳）（岩波文庫）であり、後者は検閲のためか何ページか切りとられていた。中学生のこ

ろに読んだ時は、検閲で切られたのだとは気が付かなかった。これは、ヨーロッパにおけるソ連批判の皮切りであったと思われる。日本の出版界における自己規制や共産党の支配が表面化したのは、知る限りでは、塙作楽『岩波物語：私の戦後史』（水戸：塙作楽著作刊行会、1990）が最初でなかろうか。ここで書かれている吉野源三郎は彼の『職業としての編集者』（岩波、1995、(岩波新書))で回想していない様々なことが書かれている。吉野の新潮社時代に編集した「少国民のために」の叢書は、国民学校生のころの愛読書の一つであったので、興味深く読んでいたのだが、そこで語っている自画像とはずいぶん違った人物像が浮かんできた。

- 9) 前田利道先生は、東京工大からいらした方で、後に加茂儀一教授を学長に呼ぶのに努力された。松尾正路先生は、東京外国語学校の卒業生で読売新聞の松尾邦之助（『フランス放浪記』（鱒書房、1947）他著書多数）の実弟で、第2次世界大戦前にフランス留学をされ、「友人に頼まれてブルードンの「連合の原理」を図書館でこっそり翻訳（下訳と別の機会に伺った、多分春秋社版であったのであろう）をしていたので手塚寿郎教授にみつかって、「ブルードンの文章は判りにくい」と話したがそのころは手塚先生がブルードンの研究者とはきづかなかったといってもらした。戦後はプレヴォ・パレードの『近代思想の成立：フランス・モラリスト』（現代評論社、1948）の翻訳で関根正雄『フランス・モラリストの研究』（育成社、1948）と翻訳権で争いになり、著名な関根の方に誤訳が多かったと伝えられている。随筆集が2冊ある（『地球の春：詩と批評のあいだ』（春秋社、1969）【これは編集のお手伝いをして、レイアウトと装丁もした】、『思索と印象』（たくみ書房、1980））。

北海道大学の大学院生の中村通義さん【後北海道大学経済学部教授】が小樽からの通学生であったのが縁で、「資本論」の読書会のチューターを引き受けてもらって、毎週1回向坂訳の「資本論」を開いて宇野理論をはじめ当時最新の知識であった*Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie*をはじめマルクス解釈学に必要な文献資料の手解きを受けた。確か2年ほどかけて、第1巻を読み終わったと記憶している。

- 10) 金子敬正先生追悼文集『敬友』（1994、私家本）に、「リンゴの味」を寄稿した。
- 11) Sraffa の本はもっぱら筑井さんが、マサチューセッツ・ケンブリッジ流の解釈でリードしていたが、自

分はうまく説明できなかったが、その解釈に納得できずに、これを読むために、彼の編集した「リカード全集」の解説を読み始めた。彼の初期の論文（ただし英語で改定された版、"The Laws of Returns under Competitive Conditions" *Economic Journal*, 36, 1926）小樽商科大学の学生時代に早川泰正先生に読まされていたが、長年の沈黙を破って、このマルクスを連想させる奇妙な表題の本がなぜ書かれたのかを知るために結局、彼がグラムシの親友でイタリア共産党の弾圧に抗してイギリスに結果的にケインズに招かれて亡命した形でケンブリッジに留まり、そこでヴィットゲンシュタインと知り合ったエピソードなどを調べた。後にヴィットゲンシュタインを小樽商科大学に赴任してから同僚と読む切っ掛けにもなった。（現在では、菱山泉『スラッファ経済学の現代的評価』（京都大学学術出版会、1993）という行き届いた研究書がある。）他方、副島種典先生が学部の非常勤講師をされていて丁度修士の1年の時に「資本論」第2巻の読書会を主催されていたのに入れていただいた。小島麗逸さん【経済学部卒業後、アジア経済研究所に入所。後に大東文化大学教授】と知り合ったのもこの会合である。

- 12) 山田勇先生追想文集『理論と計量に徹して』（論創社、1987）[私家本]に「何か一つでも独自の貢献を」を寄稿している。この表題にした先生の口癖の教をどこまで満たしたか、この文を書いてみて忸怩たるものがある。
- 13) 磯野先生の文献の選択は、一橋の図書館の蔵書に依存したとはいえ、初期のマクロ計量経済学文献の絶好の手引きになった。後に山田勇編『計量経済学講義』（1972、青林書院）で「日本の計量分析」を書くときに日本の計量経済学の位置づけの学説史的展開を書くのに参考になった。またそこで教わった文献が後に早川三代治文庫を整理した時に網羅的に入っていたのにも驚き、改めて碩学と呼ばれる人の収書の素晴らしさを痛感した。
- 14) 大塚金之助も山田雄三も杉本栄一と同様に福田徳三の門下であった。福田徳三や幸田成友も一時慶応義塾の理財科で教鞭をとった。大塚金之助は「日本資本主義発達史講座」の問題で、東京商科大学を追われたが、その逼塞していた時代に慶応義塾の三田の公開図書館に通って辛うじて研究を続けたといった伝説と、福田がそこで育てた寺尾琢磨などの統計学者・経済学者のお弟子さんである小尾恵一郎教授と統計審議会でご一緒するとどこかに東京商科大学

の伝統に近いような親近感が感じられた。(『福田徳三先生の追憶』(福田徳三記念会、1960)【私家本】には、三邊金蔵・高橋誠一郎・小泉信三・野村兼太郎等の慶應義塾での福田の回想記が収録されている。)

- 15) 宇津木先生の書誌学の手引きは、研究者にとっての資料集めの重要性から始まった。小樽商科大学に就職が決まったとき、小樽商科大学の図書館について教えてくださって、赴任したら経済資料協議会に大学が加入できるように努力しなさいといった具体的な指示から始まり、外国語の習得には海外留学が欠かせないので早い機会に留学しなさいといった助言もあった。留学の必要性を説くときに例に引かれたことでいまだに記憶にあるのは、岩波文庫のスマスの『国富論』大内兵衛訳を松川七郎が丹念に用語法のカードを作成して、カードの組み立ての様に改訂したが、誤訳の指摘はほとんど留学経験者からなされた、その地に行かないと生きた言語は判らないところがあるのではないかとということである。
- 16) 永原先生の講義は面白く、丹念にノートをとっていたが、ある時高校の後輩のSさんに試験のためにと借りられたきり戻ってこなかった。当時大塚久雄の『共同体の理論』が刊行直後で、それとの関連でいろいろ質問した。先生は迷惑だったかもしれない。亡くなられて葬儀に伺ったら、歴史関係の人達に「君はどういう関係か」と聞かれて往生した。西先生は、多分Turgot研究の渡辺恭彦さんかMichlet研究の藤本治さんに誘われたのかもしれないが、お書きになっているものが西晋一郎のご子息である点とどうつながるのかに興味があったのかもしれない。香内三郎先生は当時東京大学新聞研究所の若手の先生で、一橋の社会学部のジャーナリズム論かなにかを講義されていたと記憶している。1931年に大連に生まれたそうであるから少し年上の兄さんのような感じでいろいろ質問した記憶がある。講義の後に喫茶店でコーヒーをおごって頂いた記憶がある。『言論の自由の源流：ミルトン『アレオパジティカ』周辺』(平凡社、1976)も『活字文化の誕生』(晶文社、1982)と比較的最近の『「読者」の誕生：活字文化はどのように定着したか』(晶文社、2004)も書棚にあるから、書誌学と出版史の関係を考えるうえで長く影響をうけたとおもう。1981-2年にハーヴァード再訪の折、学部は別であるが瀧澤正彦さんと同じアパートメントに暮らしていて、彼はミルトンが専攻というので、興に乗っていろいろとミルトンについて話したところ、後で他の友人に「お喋りなやつで往生した」と語っ

たそうである。カナダでミルトンの詩集の復刻本を手に入れた時か、あるいは香内のミルトン解釈について瀧澤さんの意見を徴したのか、今では記憶が定かでない。

- 17) 「中国農業生産統計の一吟味——収穫統計法を中心として」、石川滋編『中国経済発展の統計的研究』第3巻(アジア経済研究所、1962)収録。さらに"Methods of Compiling Crop Statistics in China." *Developing Economies*, 3-3, 1965 としてその一部を改稿した公表。L. Buck教授の来日時にインタビューしたのもこのころである。いわゆる「大躍進」に関しては、その後中国国家统计局で直接調べたことは、『中国経済統計方法論：変容と現状』(アジア経済研究所、1987)に記したが、まだ残されている問題もあり機会があったら改定したい。石川滋教授の研究会を組織した当時の状況と主導した理念に関しては、小島麗逸『石川滋教授の方法と研究環境』『一橋論叢』87(5)、1982、125-146ページ(石川滋名誉教授記念号：アジア特集)に詳しい。
- 18) 『風土と論理』は少数印刷の同人誌であったので、どうやら所蔵している図書館は3号までが早稲田大学と近代文学館にあるだけのようなので、「風土と論理」創刊のことばを再録しておく。「経済学徒・松田芳郎とお茶を飲んでいたら、行きがかり上、同志を募って雑誌を出そう、ということになってしまった。あとで、弱ったな、と悔やんだが、松田もやはり、そう感じたそうである。とにかく、同志も集まり、創刊号もできた。仕方がない、出し続けよう、と皆肝を据えることにした。//〈風土と論理〉同人は、ひとつの新しいカストであって、日本研究を目指す外国文化研究者の集団である。ぼくらの思想的特徴は、同人規定に驅たように、マルクス主義・プラグマティズム・パラレリズム・記号論理学、の2項以上に関心を持っているところにある。前記の4項に、実存主義とナショナリズムが入っていないのは、ぼくら戦後の世代——ぼくらすべて、昭和5年~15年のあいだに生まれている——は祖国の歴史的地理的諸条件からして、意識のうえでは実存主義であり、行動はナショナルなものでしかありえない、と判断したからである。//いまぼくらは、科学の論述に文学的飛躍をもちこみ・芸術の研究を科学に解消し・法廷論争に政治を持ち込むのは誤っているが、科学者が文学的直観を体験し、芸術研究者が科学の方法を学び、法学者が社会と人間の研究に時間をさくのは絶対に必要だ、と考えている。平凡な結論だか、実行

は容易でない結論である。//1962年6月20日//大塚明記」

第3号には15人の同人名簿が裏表紙に記してある。ただ筆名だけの人や筆名と本名とを二重に記載している人も含まれており、実人員は本文に記した人達である。同人ではなかったが、津田塾大生の安田百合子さん（後にJTBの出版事業部に勤務。故人）が、印刷のレイアウトなどに知恵を貸してくれて、綺麗な20ページから24ページの横書きの薄い小冊子になっている。印刷所は書いてないが、確か第一印刷の協力を得たと記憶している。

19) 単位修得論文の計量経済学方法論の部分は、前記の「日本の計量分析」と、後に書いた『データの理論：統計調査のデータ構造の歴史的展開』（岩波書店、1978）の中に組み込んでみた。

20) 1年後に歴史学担当教員として阿部謹也さんが赴任した時には、彼の要望でHistorische Studien 一揃いを古瀬館長が入れたのは今でも記憶している。

21) 小樽から一橋大学に移って何年か後に稲葉由之教授（現慶応義塾大学経済学部教授）が赴任して、昭和40年代までは丹念に主要な統計調査報告書が揃っていてその時代の後の収書の状況と段違いであって、研究に便利であったと語っていたのを聞いて、蒐書の意義を理解して使ってくれた人もいたと密かに悦んだ。

22) 同氏は統計学・計量経済学専攻で、小樽商科大学時代は竹内清教授に師事した。逝去後の『商学討究』誌の追悼号の編集に協力した。竹内・森田両先生の追悼文が掲載されている。遺族から彼の遺愛の文献、Ragnar Frisch, *Statistical Cofluence Analysis by Means of Complete Regression Systems*, Oslo, 1934. 192 p. を頂戴した。松田文庫の中の稀覯書の1冊である。二人で努力して小樽商科大学所蔵統計資料目録は何回か改定版をだした。その経験はその後の統計発達史研究の基礎になった。

23) 図書委員の他に、実質的に館長補佐の役を古瀬館長に依頼された。図書館員の構成を変えるべく、まず管理科学科の助手の定員を借りて、慶応義塾大学院文学研究科図書館学専攻で「農家経済調査の表の検索のためにデータ構造の分析」（後に「統計用語のシソーラス作成のための基礎調査：農林省『農家経済調査』の場合」『商学討究』22-（2/3）1971で公表）をしていた松井幸子さん[後に図書館情報大学（＝筑波大学に統合）教授]を、実質的に指導した一橋大学の細谷新治先生の推薦で任用する手配をし、さらに図書館の正職員に図書館短期大学新卒で図書館職

員公務員試験に合格した若手を任用する手配をした。自分自身も図書館学を遅まきながら勉強した。その過程で小樽商科大学の学生時代に化学の川原至鳳教授が講義のなかでの論文の書き方、外国文献の引用の仕方、英文抄録の書き方などを丹念に教えられたのは、化学が情報学の応用の先進分野であったので先生も造詣が深かったためだったのだと悟った。

古瀬先生が館長として分担研究者であった文部省の大型科学研究費（森口繁一研究代表者で組織）で汎用計算機の図書館業務への応用の手伝いを始めたのもこのころである。

24) この文庫目録の作成の経緯は、阿部謹也さんの『北の街にて』（講談社、1995）でも回想されていて私の名前も出てくる。たびたび作業場から抜け出したと描かれているが、私にしてみると異論がないわけではない。彼は、教養所属で「歴史学」の講義が週に1コマあるだけであり、私は何コマも持たされていたうえに、母校であつたので学内事情が分かったと思われたのか新任の割に各種委員会委員に選ばれての雑務が多く、好きこのんで作業場から抜け出したわけではなかったからである。

25) 後に佐藤隆三教授との共訳で英語訳（*The Political Element in the Development of Economic Theory*, tr. by Paul Streeton, 1955）からの翻訳を戦後の改定版として出されている。（1967年、改定増補版1983年）

26) 手塚のワルスの「純粋経済学要論」の日本語訳は森山書店から、生前には上巻しか刊行されなかった【1933】が、当時の日本の印刷・造本の水準から見ると見事な出来栄である。その全体の訳稿は完成していたが、手塚記念会の手で岩波文庫に上下2巻で1954に刊行された。校訂の労は久武雅夫。後に久武単独訳が岩波書店から1983年に刊行。

27) 1932年に『高岡熊雄先生〔北海道帝国大学〕在職三五年記念論集』に「ブルードンと所有権」と題して寄稿しておりそこでは自分をブルードン主義者として宣言していた。

28) この解題を書くために手塚の論文等を通じて筆者の調べたことが、あたかも周知の事実であるかのように無断で引用されているのを見て、署名はしておくべきだったのかもしれないと思った。（フランス語訳は、松尾教授の手による。）浜林教授の話では、坂田教授は、書かれている内容は自分の専攻外で責任が持てないとして、編者として署名するのは断られたそうである。署名すべきだと思ったのは、後に『手塚寿郎先生の追憶』（『藝目英三個人雑誌』『緑丘』

編集部、1967.10. 13) で門下生の一人の麻田四郎教授が「手塚先生の経済学」と題して、16-25ページで筆者の見解に「[手塚教授の人と業績] (無署名論文)

は「社会主義と数理経済学とへの関心という日本では一見奇妙にみえる」手塚先生の研究態度を説明して、「教授はワルスを単に数理経済学の創始者としてのみとらえたのではなく、その理論を支えている自由の概念を啓蒙思想にまでさかのぼって追及するとともに、ワルスの社会主義を支えている平等の概念を追求して、フランス社会主義思想へのつよい関心を示すにいたった」と述べている。つまり、この「人と業績」の執筆者は、手塚先生に社会主義者と数理経済学者の二重性をワルスを媒介として理解しようとするが、手塚経済学のそのような理解は、私の理解している手塚経済学とはいささか食い違うものであった。そこで私は、この機会をかりて、私の理解している手塚経済学について述べる…【中略】…要するに、手塚先生は人としては自由主義者であったが、社会主義者ではなかった。先生の集められたフランス社会主義文献は社会主義とではなく、純粋経済学の自由主義と結びつけられるべきものである。」と反論されている。無署名ということにこだわっていられたようで、どこかで「この無署名論文の筆者は・・・」と書いて反論を書くべきだったのかもしれない。一言でいうならば、筆者は手塚教授の考証(手塚寿郎「ソシアリスム・ソシアリストと云う言葉の出典」『緑丘』第27-第28号、1928など)に基づいてsocialist という言葉の多義性を前提として、この語を使用したのであるが、反論された麻田教授は、日本での長い慣習になっているマルクス主義と同義と考える発想に基づいていたのではなかろうかと思ひ、簡単に説明したのはとても判ってもらえないと帰国後に、読んで思った。何分、この書物の出たのは、筆者の留学中であり、当然寄稿の依頼もなかった。

筆者がこの無署名論文を書いたのは、アメリカ留学の直前であった。フルブライト奨学金では、英語力を涵養せよと東京で英語研修の期間があり、その間浜林先生の指示で大日本印刷と校正刷りを抱えて往復し1966年3月末日に『フランス社会思想史文献目録』(春秋社、1966)として刊行されたのでよしとしなければならなかった。

- 29) 滞米期間の出来事は、もう今では正確には記憶していないが、ミネソタ大学からの訪問教授のJ. Chipman: Econometrics Methods, I, とMathematical

Approach to Cyclical and Growth Modelsのどれかで、「今の[アメリカの]計量経済学を勉強しようとする学生は、フランス語の文献を読まない」と叱っていたのが記憶に残っている。保存しているノートからは、研究指導を受けたA. Bergson, D. Perkins, W. Leontiefなどの演習と講義の他にSimon Kuznets, Dorfman, Houthakker, などの経済学部講義を受講したのであるが、この他に潜って聴講していたのに政治学部のL. HartzのNineteenth-Century Political Theory と歴史学部のS. HoffmannのIntellectual History of France Since 1789がある。手塚研究の延長線上である。日本で一所懸命に読んだH. S. Hughesの講義Intellectual History of Europe in the Twentieth Centuryは残念ながらサバティカルで大学に居らず非開講であった。とにかく、小樽商科大学から一橋大学の大学院に行ったときには、講義科目の多さに目を奪われたが、それでも大部分の講義は教師の方が勝手に毎年学生が変わることには関係なく、多くの教授のフランス社会思想史ならば、ある年はルソーであり、ある年はモンテスキューという風であり、ハーヴァードのように体系的に通史を核にして多彩な科目が開講され、それなりに毎年ごとに完結し、そこに大学院生が講義科目を成立させるだけの人数が集まるといふのに驚いた記憶がある。

- 30) 後に詳細に述べるが、いわゆる大学紛争は、1969年であり、当時の大学当局は、建物の学生による封鎖が続いても徹頭徹尾対話路線をつらぬいた。学生の要求は、教授会団交であったが、「教授会が団交することはありえない。教授会は自然人ではなく、法人格がありうるだけであるから、交渉するならばそれは代表者との交渉であり、認められるのは、構成員団交だけである」として昔、喜多教授に教わった法理論でたびたび団交をした。その折は、臨時の交渉委員の一人として話をする事が多く、形式論理の組み立てで構成する議論は学生に嫌われて、「あいつに喋らせるな」という野次がたびたびとんだことを記憶している。

- 31) 自分の蔵書として、比較的まとまった収書となったのは、手塚寿郎のサンシモン主義者の文献収集でも十分ではなかったFélicien Davidの楽譜と関係文献である。Félicien Davidはサンシモン主義の讃美歌の作曲家でその一部は手塚文庫にも入っているが、リストやビゼーなどに影響を与えたオペラ作曲家としての全貌を示すものではない。この収集は社会改革活動での音楽の果たした役割を明らかにしたかった

からである。その関係で、1904年刊で必ずしも稀覯書ではないかもしれないが、*Les Hymnes et chanson de la Révolution*をパリの古書店で見つけた。本は探していると本の方から呼びかけてくると思った。これは重い大版の本で小さな古書店では海外送りはしてくれず、ホテルに持ち帰って郵便局から送るのに苦労した。Félicien Davidの楽譜は、パリの楽譜専門の古書店では、たどたどしいフランス語での説明だったので最初のころは鼻であしらわれたが、円が強くなるにしたがって顔を出すと思えていてくれて、このようなのが入ったと出してくれるようになった。ある時はパリに海外研修中の栗田啓子(当時小樽商科大学教授)さんを煩わしてコピーを撮っていただいたものもある。これらの文献はもう少し手元に置いて原稿をまとめた後に青森公立大の図書館に寄贈したいと思っている。

32) このコレクションの件を教えてください購入に努力してくれたのが、イタリア書房の伊藤基道さんで、故人になられたが、小樽商科大学の購入した残りは京都大学人文科学研究所に購入してもらえたと話してらした。

33) 2週間足らずの駆け足のヨーロッパ旅行であったが、アメリカの諸図書館と異なる状況は印象的であった。この時の経験が、「Deus ex machinaなしの図書館近代化—古い社会科学系小図書館の例」『経済資料研究』4号、1971に反映されている。さらに「KWIC索引を利用した溯及的書誌—社会科学における書誌と図書館」『商学討究』24-(2)、1973に発展し、Matsuda & Matsui, "Effectiveness of KWIC Index as an Information Retrieval Technique for Social Sciences. " *Hitotsubashi Journal of Economics*, 15-(2), 1975となり、後にUNESCOの関連委員会から呼ばれる切っ掛けになった。この旅行のなかでWHOの図書館の司書のCampanella夫人と知り合い、後にアメリカ再訪したときに再びお目に掛ることが出来た。(夫人はHenry Sigeristの娘であった、此のいきさつは飯田広夫「Henry Sigeristのこと」『記憶の中の旅』(1986、響文社)に詳しい。) 此の時は、ご夫君のA. Campanellaの関心の的であるイタリア民族国家形成の立役者でもあり、ヨーロッパ統合運動思想の創始者のひとりでもあるGaribaldiの研究が議論の中心であった。この後長く著書を頂く関係が続いた。日本との戦争との関連で深い関心と同情をもって、収集したコレクションを日本に入れられないかと相談されたが実現させられなかった。現在 The Anthony

P. Campanella Collection of Giuseppe GaribaldiとしてUniversity of South Carolinaの図書館の貴重書コレクションにある。

34) 古瀬先生からは、後にその蔵書の一部を東京国際大学に渡された時に論理実証主義と分析哲学関係の文献を私にくださった。自分の集めた論理実証主義などの文献と一緒に今度の青森公立大学に寄贈する中に含まれている。

35) 最初のアメリカ留学からの帰国後、木田橋さんと一緒に「手塚寿郎著作集」6-7巻本にする予定で編集を試みた。当初は、雑誌等の初出をオフセット印刷で複製して活字組をしないで短時日で完成の予定であったが、浄書稿が数多く発見され、それを活字に起こすのは、今のPC時代と異なり多額の経費が掛かるので躊躇していたが、佐藤茂行さんがそのうちのかかなりの部分が翻訳でありそのまま活字にするのはいかかかという意見を出された。手塚教授の『大西猪之介経済学全集』(宝文館)の紹介文で、翻訳とみなすべきものもあり遺稿を刊行するときには注意を払う必要があるとの記述もあり、結論が出ずに中断して今日に至っている。

36) 大学院博士課程の単位修得論文の延長線上の試みがやっと軌道に乗って理論計量経済学会の関東部会での報告が「設備投資と資本廃棄の企業間格差」『経済研究』16-(3)、1965に掲載され、Leontiefのセミナーでも報告した後であったので、帰国後の拡張の試みが出鼻をくじかれた感はぬぐえなかった。

37) パリの古書店では、英米の本、ロンドンやニューヨーク、マサセッチュセッツのケンブリジでは、独・仏・イタリア語の文献を探した。当該国の値段の半値以下であった。Vicoのフランス語訳もまたサンシモン主義者のMichel Chevalier, *Lettres l'Amerique du Nord*, Paris, 1837も、それぞれそのようにして手に入れた。あまりの安値で今でも記憶にあるのは、ワルシャワで入手した *Oeuvres de Rabelais* の1829刊のNouvelle Editions, Bruxelles版である。*Vies de Gargantua et de Pantagruel*の入ったT.1^{er} から4^{me}までの4巻本で *Vies de Gargantua et de Pantagruel*としてもT. 5^{me}の欠けた端本なのか否かは、旅先で今のようにインターネットの普及している時代でもないし、Rabelais書誌も手もとにないので、Bruxelles版が珍しいのかもわからないが、いづれにせよ、5巻目は後世の偽版であるとの説もあつたはずで、まあ欠けていても良いかと買った。どう見てもそのころパリの古書店で別な版本で見かけた19世紀初頭のものの1000分の1の

価格にも満たなかったと記憶している。T.5も入った1巻本のGustave Doréの版画入りのP. L. Jacob (bibliophile)編の*Oeuvres de Rablais* 1857年版をその後別な機会に見つけたので、読むのには不自由はないし、休んでいるときにひも解くには小型本でもあり、Priviège de Henri II, du 6 août 1550も入っているので求めて良かったとも思っている。専門家でないものがわざわざédition critiqueを求めるまでもあるまいとも思ったからである。今一つは、ブタベストで入手したValeryの1巻本の選集*Morceaux Choisis*でNRF(1930)刊の16^{ème} éditionである。自分にとっては欲しい論文も詩も入っているのでこれで十分であると旅行中鞆の隅に入れて持って歩き、今でも手元に温めている。

- 38) 所得分布の研究は、大学院生時代に溝口さんが個票データを見つけてきて、個別情報が推測できないように加工して所得分布の遷移を解析してみたらと勧められて行った「個人所得分布構造の変動——昭和29-33年の高額所得の遷移を中心として」『一橋研究』7号、1961では、標本数が少なすぎてうまく秘匿できず、等高線型のグラフ表示であったので成功とはいえなかった。今回は、古瀬ゼミの出身で一橋の大学院で溝口ゼミの寺崎康博さんが全面的に計算機処理を担当することによってきわめて生産的に共同研究が進行した。中核は溝口・寺崎・松田の組み合わせで他にいろいろの分担者が加わって研究が進行した。最終的には、日本語では、溝口・松田(編)『アジアにおける所得分配と貧困率の分析』多賀出版、1997にまとめられている。他に英文での刊行もある。長期時系列の歴史統計の推計は、梅村先生と一緒にこれも何度か文部省の科学研究費の補助を得ての研究を続けた。これは統計調査史のための資料の蒐集と重なってくる。
- 39) これは当初倉林先生とのオーケストラの聴衆者調査で始まり、当時経済研究所計算機室の助手の有田富美子さんとの協力で始まった。この結果は、日本語では雑誌論文が多いが、最終的には、Yoshimasa Kurabayashi & Yoshiro Matsuda, *Economic and Social Aspects of the Performing Arts in Japan*, Kinokuniya, 1988, として刊行されている。さらに文化庁の依頼で、元統計局長の永山貞則早稲田大学教授と一緒に、芸術家のキャリア形成と生活調査を行う。大学生の芸術活動への参加と享受に関する調査も行われた。これらは調査設計と実査には、当初統計研究会の全面的な協力を得て統計研究会の法岡淑子さ

ん【後、滋賀大学教授】が参加し、折橋徹彦・周防節雄・若松美黄・守屋秀夫・清水裕之・吉村融などの大学の教員と演出家の田才益男などで、三善晃を研究代表者にしたプロジェクトであり、その後は5年周期で、約25年に達する。今日の文化経済学会(日本)を1992年に発足させる原動力になった。【なお初代会長は、倉林義正、副会長は池上 惇で、初代理事長は筆者が務めた】

- 40) このプロジェクトのデータベース編成は、郡司篤晃教授を主査として、府川哲夫の努力でまとめられて、最終的には郡司篤晃編『老人医療費の研究』(丸善プラネット、1998)として上梓された。データベースの編成には舟岡史雄も参加し、計算機処理の中心は、松浦和幸が分担した。
- 41) 国内で系統的に収集しているようでもない。原本の購入には巨額の資金を投入するところも復刻本の収集にはあまり興味が無い様である。かつて大阪市大の岸田晩節教授がヨーロッパ文献のセンターの樹立に努力を重ね、日本学術会議での何回かの勧告に漕ぎつけたが実現はしなかった。
- 42) 統計文献センターを中心に企業・事業所リネージの歴史統計データベース編成の作業と統計調査史を合わせた研究の結果は、方法論を含む報告書ともいべきものを『データの理論』岩波書店、1978として刊行した後、数多くの中間報告書のようなものを刊行したが、一応の最終報告書ともいべきものを、Matsuda, Y. & Fumiko Arita, *Behind State Company Nexus; one and half a century of experience of Japanese economic development in a statistical mirror*, 1996.として上梓した。

この作業のための企業会計等の歴史的資料の蒐集も蔵書の一つの核である。なおここにたどり着くまでは、どちらかというと歴史資料・独自調査などの個票の秘密の秘匿が必要ないデータを利用しての仕事であるが、その考え方の基本はマイクロ・データ・リネージである。これには有田富美子・寺崎康博・周防節雄・大久保恒治・松浦和幸・野島教之・杉山文子・吉沢照子など計算機・情報処理の専門家との研究と実験が基礎になっている。

歴史統計から現在の統計に戻ったのは、経済研究所の外で統計審議会の専門委員としての仕事の中である。そこでは、松井博(当時統計局)・周防節雄(当時関西大学)の協力での事業所統計調査・工業統計調査等の事業所を調査単位とした統計調査の個票を使用しての実験である。なお、『企業構

造の統計的測定法』(岩波書店、1995)を主論文として、『ミクロ統計データの描く社会経済像』(日本評論社、1999)を副論文として、一橋大学で博士の学位を1999年に取得した。これ以外の、法人企業統計等との本格的事業所・企業等のリンケージ実験は、松井博・周防節雄・古隅弘樹などの協力で、現時的資料の統計法の目的外使用の許可を得ての研究である。まだ論文での公表が多く、書物の形で刊行されていないのでこれ以上の言及はここでは省略する。幸い統計数理研究所の土屋隆裕准教授が編集責任者で『統計数理』57-(2)、2010「特集ミクロ経済データによる統計解析--日本の法人企業の構造」で分担研究者の最近の研究成果もまとめられている。

- 43) 1951年に発足した経済資料協議会は、International Federation for Documentation [約100年の歴史があった]と同様に、情報化社会の変容のなかで2008年にその長い歴史を閉じたが、そこでは、前田昇三・生島芳郎・川原和子・矢倉伸太郎・高橋益代などの多くの人達と一緒に編集した『日本経済統計資料総合目録』(経済資料協議会編、同朋社、1979-1980)、「農林業」、「鉱工業・エネルギー産業」、「財政・金融・商業・貿易・運輸」の3巻を刊行した。

それぞれ「書誌編」と「所蔵編」(経済資料協議会加盟機関等の所蔵状況)から成り、所蔵編の計算機処理は松井幸子が担当している。この編集は、古瀬大六・山田勇・安藤良雄の諸教授が文部省科学研究費の研究代表者を務められ、前田・松田が幹事役で、原 朗・増井幸夫など多くの方が参加された。幾つか

の斬新な試みもあって今でも利用されているようであるので、もれ等の指摘もある行き届いた書評として、『ドキュメンテーション研究』に収録された農林業編への磯辺俊彦(29-(11)、1979)と財政・金融等編への松浦宏(30-(10)、1980)に言及しておく。

- 44) 調査結果は、統計資料シリーズで2冊にまとめられているが、解析結果の要約は、日本語では松田・周防「日本の社会経済研究と統計データの利用形態」『経済研究』35-(4)、1984と英文は"Demand for Statistics in Japan" *Information Market with Special Regards to Social Science Information*, (ed. by Tamas Földi) FID, 1986 として公表された。

- 45) このプロジェクトは当時の中国国家统计局の全面的な協力で行われた。一つは、日本統計協会でも永山貞則を委員長とする「中国における経済統計整備に関する研究会」(1993年)であり、今一つは溝口敏行と一緒に上海财经大学の王惠玲教授を中心とした研究組織との文部省の科学研究費による共同研究であり、溝口敏行・王惠玲・松田芳郎・董逢谷(主編)『日中統計調査比較研究』(復旦大学出版社、1994)

【中国文】で刊行されている。その後さらに当時京都大学の辻井博教授の協力で中国農業部の固定点農家調査の個票データの利用や旧金陵大学でL. Buckの行つた農家調査の中間集計表による個票データの復元研究に広がっていった。すなわち辻井博・松田芳郎・浅見淳之共編著『中国農家における公正と効率』多賀出版、2005である。

Reflections on My Past Research and Book Collection, Which Is to Be Donated to the Library of Aomori Public College

Yoshiro MATSUDA

Abstract

Soon I shall end my academic career, but if time allows, I would like to continue my research as best I can using a small number of books. The rest of my book collection may be sold to second-hand book dealers or donated to some interested person. The collection is the result of one man's research and seems to have unity.

What has been the main current of my research and book collection? The Japanese people have experienced two periods of severe censorship. One was carried out by the Japanese government against the popular sentiments of democracy, socialism, and egalitarianism during the period after World War I. The other was done by the Occupation Army of the United States of America soon after the defeat of Japan in World War II. This censorship was thorough and extensive and was applied not only to printed documents but even to private mail. In addition, the Occupation Army wanted to hide their censorship because they knew it was not compatible with the democratic ideals they wanted to propagate. The reality of this censorship is revealed in my research and book collection. Furthermore, through the collection, one may trace the history of ideas in Japanese culture. This short autobiographical essay briefly reviews what I have encountered from childhood to college student days in real publishing history. It also sheds light on the strong influence of socialist thought (stemming from Marxian economics) on the Japanese academic world which has been dazzled by the ideals of socialist countries. In addition, it gives some counter examples obtained from my past research on Chinese socialism since 1949.

My basic research methodology has been statistical empiricism (positivism) in the tradition of French radicalism, developing out of the work of the Encyclopedists via the Saint-Simonians and Leon Walras. The research began with the history of economic statistical survey systems and extended to econometric history and eventually to library and information science. Guided by intellectual curiosity, the scope of my interests widened to include cultural economics, of which service industries, including publishing and library and information science, are examples. It is my hope that my donation will be of some future use at Aomori Public College.